
Eleanor Airdeal

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Eleanor Airdeal

【コード】

N7863H

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

背は思ったより小さかった。抱きしめた腕は焼けそうだった。だ
けど…

孤高の人 1

その人は噂の人だった。

滅多に本気にならないけれど本気になったときの「気」は並大抵じゃないって。

男ばかりのこの世界で。

その人は果敢にも生き抜いていく力を持っていた。

エレノア・エアデール。

その人の名前だった。

最も神官だなんて時代遅れの職業が厳然としてあること自体問題だ
と思うけど。

神官っていうのはまあ軍隊みたいなもので。

女で言うところのシスターとかの男版かと思っていいたら違ってて。

2

神官だなんて言いながら本当は軍の総司令部みたいなもんで。

万一他国に攻められたとき。

神官が指揮を執り。

神官が魔法を唱えこの国を守っていくんだ。

そして本人が望む望まない関わらず20歳になったら神官の講習で
行かなければならない。

それは絶対だった。

俺は今年満20歳になり。

半年間の訓練を受けることになった。

エレノア・エアデールは線が細くて。

男なんだけど教官に何年か前からいると聞いて。

なぜ噂になったかという見かけに騙されたどこぞの馬鹿が二度と話せなくなったとか。

（これは俺の推測だけど魔法で口封じを唱えたのではないとか。見かけに騙されたさつきとは違う馬鹿がエレノアを襲って逆に返り討ちに遭ったとか。

その割にきれいな顔をしてるからどこぞの馬鹿は後を絶たない。

男色を推奨するわけではないけれど世も末でみんな何も思わなくなっていた。

男だろうが女だろうが襲うものと襲われるもの。

食うものと食われるもの。

どちらかに属し。

油断は出来なかった。

そんな俺も類に洩れず噂のエレノアを見たくて。

ダメもとでエレノアが所属する風見市の神官講習を希望した。

どうせなら楽しくつらい講習を乗り越えたいじゃん？

孤高の人 2

運が良くというか。
運が悪くというか。

俺は講習の第一志望地に振り分けられた。
そしてエレノアの勤務する駐屯地に配属され。
エレノアが俺の講師となった。

全部希望は書くんだけど俺は理由は書かずただエレノアのいるこ
で講習を受けてエレノアから直々に魔法も習いたいと希望だけ書い
たらこうなっただ。友人のイサミに言ったら。

「何かはめられてんじゃね？」
と言われ少し不安になりながら。

俺は希望地を書いた紙を見たんだ。

聖・アキヤ様

講師／エレノア・エアデール
駐屯地／風見市青葉区

7月1日から半年間講習を命ずる。

「じゃ。また半年後な。」

イサミとはそこで別れ俺は駐屯地に向かったんだ。
エレノアと話せるなんて夢みたいだと思いつながら。

青葉区駐屯地はでっかくそびえ立つ地下2階から地上8階建ての大きなビルだった。

駐屯地だなんて大げさな言い方されるから俺は勝手に要塞みたいな建物を想像してたんだけど。
実際はおしゃれなビルだった。

俺は胸を弾ませそのビルに入ろうとしたら。
誰かとぶつかった。

「すみませつ…」

一瞬息をのんだ。

だってぶつかったのエレノア・エアディールその人だったから。

どうして判ったかって？

名前が頭の中で響いたんだ。

俺には少しだけ魔法の素質があるのかもしれない。
たまに。

本当にたまになんだけど頭の中で名前だとか考えてることだとかが判る時があるんだ。

エレノアは俺を一瞥して。

「こちらこそ。」

そう言った。

俺はエレノアの姿を判らないように凝視したんだ。

だつて背が思ったより低くて。小さくて。細くて。瞳が大きくて。

印象的な顔立ちをしてたから。

だからよからぬ輩に人気があるとも言えた。

「何ですか？」

俺の凝視にエレノアは耐えられなくなったみたいで。気持ちのいい声で聞いてきた。

「へへへ。」

俺は変な笑い声を出してしまい。思いつきり引かれたんだ。

そして鋭い眼差しを向けてきた。

「ってかそういう意味じゃなくて。

俺今度からあなたの生徒になるみたいで。

ちよつと嬉しかったから。」

正直に言つと。

「エレノア・エアデールです。」

俺が名乗る前に名乗ってくれたんだ。

孤高の人 3

「エレノア!!」

そこへエレノアを呼ぶ声がした。

それはそれは派手な恰好の人で、俺ですらちよつと引いた。正直。

「アスカ。」

エレノアは瞳を全然動かさず。

ただ名前を呼んだ。

よく見るとエレノアそっくりで。

俺が何も言わず引いてると。

エレノアが。

「ああ。これ妹のアスカ。」

そう言った。

ああ。何だかわかった気がする。全部俺の勘違いで。

妹アスカがエレノアの容姿をしてるから噂になったとか？

「アスカ・エアデールです。」

あんたも私の演技に騙された口？」

アスカは確かにエレノアの顔をしてたけど。

何だかひどく蓮っ葉な感じで。

「…まだやってんのか？」

エレノアはうんざりした表情で。

俺を見て。

「まさかまた私目当てで希望書いたとか？」
凶星をさした。

だって噂のエレノアに会ってみたかったし。
綺麗な顔してるって言うし。

まてまてまて。

やばいぞ。俺。

混乱してる。

「不埒な輩排除して口封じを唱えて滅多に本気にならないっていうのは？」

俺はなんだか脱力しながら呟いた。

「はーい。わったしです」

類に洩れずアスカが笑いながら手を上げた。

ってことはみんなエレノアだと勘違いしてるだけ？

「だって〜。エレノア地味だからこらで一発派手な噂流したかったんだよね〜。」

私ですら女版の神官の中で一番なのにエレノアってばトロいし。
誘いに乗ったらあっちが勝手にエレノアだと勘違いしてくれちゃって。

名乗るのも面倒だしでも不埒な輩は排除できるし。」

噂は噂でしかなく。

エレノアは凄くも何でもなかったらしい。

ただ噂だけが先行しただけだったみたいで。

「エレノアの指名をするだけでも別にいいんじゃない？って思うんだよね。」

私としては。」

アスカはそう言って。

「ほんじゃ。お先に。」

エレベーター奥の部屋に消えて行った。

取り残された俺とエレノアの間には微妙な空気が流れて。

「あの。」

一緒につぶやいた。

そして俺は強引に聞いてみた。

「あなたは本当にパツとしないの？」

本人に聞いたらどう答えたらいいか答えに窮するって判ってたけど。

9

エレノアは少し唇を噛んで。

「今からでも遅くないから担当と駐屯地と変えてもらえばいい。」

そう言ったんだ。

「私では役不足が目に見える。」

心ではそう聞こえた。

エレノアは人気があつて。

エレノアは滅多に本気にならなくて。

エレノアは凄い魔法の使い手で。

全部ウソだったんだ。

孤高の人 4

そして俺は騙された感が強かったから。
何だかとっても悔しくて。

「どうせあなたについても何にもならないんでしょうから俺もそう
しますかね？」

エレノアは一瞬こわばった表情をしたけど。
何も言わなかった。

「何であんた講師なんかやってんの？」
俺は悔しくて。

出来そこないが講師だなんて。
もう気づいたら止まらなかった。

勝手な噂に惑わされて悪いのは俺なのに。

エレノアはエレベーターに乗ろうとした。
それを俺は追いかけるように無理やり一緒に乗り。
また口を開いたんだ。

「あんた向いてないんならさっさとやめろよ？」
講師なんかそんな細い体で魔法すらろくに使えないんだろっ？
アスカに勝手な噂流されてあんた悔しくないわけ？」

「…判ったから。
もう判ったから。」

エレノアはこわばった表情で俺を制する仕草をした。

「あなたの名前すら聞いてなかったけど。
あなたの講師の件駐屯地の件全部私が責任を持って代えてもらうから。」

「俺の要求はそうじゃない!!!」

俺は自分でも驚くほどに激昂したんだ。

ビクツとエレノアは肩を震わせる。

本当に腹立たしくて。

悔しくて。噂に流された自分が。

噂立てられてへらへらしてるエレノアにも。

「俺はあんたにちゃんと魔法を教えてもらう。」

あんたに全部ちゃんと教えてもらうから。

代えて済むような甘い問題じゃないんだ。」

俺はそして不敵な笑みを浮かべたんだ。

目の前のエレノアに俺は純粋な興味を持ったんだ。

その笑みにまたエレノアは蛇に睨まれたカエルみたいな表情を浮かべた。

「とにかく部屋案内してくれる?」

もうため口で構わないと俺は思った。

エレノアは何も言わず8階でエレベーターを降りて行った。

講師と生徒はマンツーマンで部屋も一緒なんだ。

エレノアは明らかに俺に動揺してた。

多分今までは噂の真相が判ると生徒の方が興味を無くし。

代替講師と代替地を紹介して済んでたんだろということが容易に想像で

きる。

なぜなら。

エレノアと俺の部屋になるであろう部屋は一人部屋だったから。
きつと見越した上での配置だったはずだ。

部屋 1

「何？あんた。」

2人で寝る趣味でもあんの？」

俺は判ってたけど。

本当は判ってたけど。

本当に何だかとっても悔しくて。

下種な言い方をしたんだ。

下で初めて会った時とは形勢は逆転。

エレノアは小さく縮こまって。

消えそうな声で。

「いや…」

あの部屋用意してもらったから。」

私とは違う場所に。

そう聞こえてなおさら俺は憤慨したんだ。

だって規則はマンツーマンの同じ部屋で。

四六時中一緒にいて魔法から何から教えてもらうのが原則なのに。

「なあ。なあって。」

俺は別に此处で構わないけど？

エレノアと一緒にいなきゃ講師の意味ないだろう？」

エレノアを別にどうこうしたいとか。

そんなことを思ったわけじゃないけど。

頑なに拒むエレノアに焦れて。

俺は思わずエレノアの腕を掴んでしまったんだ。

「あのさ。何警戒してんのか知らないけど俺はただ魔法を四六時中一緒にいて教えてほしいだけなんだけど？」

それとも俺に気があるとか？」

…エレノアは答えなかった。

ただ腕を振り払い。

鋭い眼差しを向けて。

「人のベッドで気持ち悪いだろうけど今日だけ此处で寝て？」
自分の部屋を空けたんだ。

「あんたは？」

俺が聞くと。

相変わらず鋭い眼差しのまま。

「私は今日は良い。」

「良いって？」

「あんたに関係ないでしょう？」

「関係はあるって。」

何せ俺あんたの生徒だから。

講師のエレノアに野宿でもさせたとなったら厳罰食らうから。」

多分エレノアは俺のことが大嫌いだって思う。

だってきつとエレノアは何か考えがあつて。

俺にベッドを明け渡し自分はきつと野宿だろうがなんだろうが良い
って思ったんだと思う。

つくづく俺も性悪だと思っけど。

「一緒に寝ればいいじゃん？」

俺男を襲う趣味はないから。」

そう言われれば言われるほどに警戒するのが常で。

俺だって本当は判ってた。

でも酷いことだと判っても口は止まらなかったんだ。

部屋 2

アスカとは大違いだった。
蓮っ葉な感じのアスカは確かに強くて魔法も使えて。
何か好き放題生きてる感じで。

それにもあまりにも通された部屋がエレノアらしくて。
名は部屋をも表すんだと思ったんだ。

きちんと整頓されていて。
本は魔法書以外何もなく。
簡易ベッドには薄くてきれいな布団とマット。

最低限生きていく上だけに必要なものしか無かったから。

「お願いだからここで寝て？」

気持ち悪いだろうから今から布団一式替えるから。」

そう言うエレノアに俺はまた焦れて。

「だからそういうのは気にしないし!!」
そう言うても。

エレノアは布団を替えようとして。

俺は思わずその腕を掴んだ。

「だから良いって!!!!」
そう言うつと怯んで。

「そういうわけには。」

「だから良いんだって!!!!!!」

俺が激昂するとやっと俺を瞳に映した。

俺の心に響く声は。
こう言ってた。

「ここさえ乗り切れればこの人だつて嫌になるに違いないから。」

「俺には隠し事は通じないからな。エレノア。」

俺にはあんたが考えてることが手に取るように判るんだ。
じつとその瞳を見て。」

俺は掴んだ手に力を入れる。

「そんなにまでして何で嫌がるんだ？」

あんたは男で俺も男で。

俺は男を襲う趣味はないんだから。

なのになぜそうムキになつて嫌がるんだ？」

答えないエレノアは。

瞳を伏せた。

…その瞬間俺の中で凶暴な感情が爆発したんだ。

俺はエレノアを掴んだまま簡易ベッドへダイブした。

そして組み敷いたんだ。

何がしたかったわけでもなく。

組み敷いてから気づく。

エレノアは視線をさまよわせてただけだった。

細い細いエレノアの体は冷たかった。

生きてるのが不思議なくらい冷たかった。

俺が何もする気はないと判って。
エレノアは小さくため息をついて。
俺を見上げ言ったんだ。

「やっぱり講師替えてもらった方がいい。
お互いのためにそれがいいと思う。」
俺はなおさら離したくなくなつて。

更に腕に力を込めて。
エレノアを見下ろしたんだ。

部屋 3

自慢じゃないけど俺は結構モテるから。
直前まで彼女もいたし。

ただ本気じゃないから神官講習に託けて別れてきた。
半年も会えないのは辛くない？
どうせなら新しい彼氏見つけなよ。

不誠実な態度の俺に不誠実なお似合いの彼女で。
心をほしいとは1度だって思ったこと無かった。
ただその場限りの快樂さえあればあとは面倒で。

だからこんな生真面目なエレノアみたいな人種に会ったことがなくて。

だから興味が沸いたんだと思う。

「放せつて。」

言われればなおさら放したくなくなるのが俺という人間で。

「嫌なこつた。」

あんた講師だろ？

自分の力で逃げ出してみろよ？

恥ずかしい。

生徒に組み敷かれるだなんて。」

エレノアは力を抜いて。

諦めた眼差しで。

俺を見つめ。

「私は敵わないことには手を尽くさない主義なんだ。力で敵わないって判ってるのに逃げ出そうとして下手に怪我するのも馬鹿らしいから。」

あんたは男に興味ないんだろ？

こんなことして空しくないのか？」

その眼差しは。

悲しそうで今にも泣きそうで。

でも俺には扇情的で。

「エレノア。」

名前を呼ぶ。

「俺あんたのこと好きかも知れない。」

……心のまま俺はいつも生きてきた。
なのに。

本当に心が欲しいと思ったのは初めてだった。

エレノアは何も言わず。

何も答えなかった。

ただ瞳だけで理不尽なのはそっちだと責める。

俺はこんなに自分が臆病だったなんて思わなかった。
そして。

組み敷いていた力を緩めて。

エレノアが起き上がるのを眺めて。

俺はひどく後悔したんだ。

部屋 4

服だって破るなんて野蛮なことしてないし。
キスだってしてないし。

だけど。

精神をひどく凌辱してしまった気分だった。

起き上がったエレノアは小さく震えていた。

何だか本当に悪いことをしてしまったみたいで。

「名前は何？」

低い声でエレノアが呟いた。

「俺の名前？」

「他に誰がいる？」

「アキヤ。聖アキヤ。」

「他の人間にはどう呼ばれてる？」

「付き合った彼女とか友達とかはアキヤって呼ぶけど？」

「じゃあ。私は聖ひつと上で呼ぶからそのつもりで。」

俺が頷くと。

エレノアは続けた。

「そしてさっきの話だが。」

ベッドは本当にこのままでいいのか？」

俺のポロツと出た告白はどうもなかったことにしてるみたいで。
何だか安心したような悔しいような複雑で。

そして最後に。

「私がこのまま聖の講師をやるのであれば部屋も替わるし。

甘やかさないからな。」

それはエレノアが俺を見て。

真正面から俺を見て。

やっと言ってくれた言葉で。

俺は素直に頷いたんだ。

「エレノア。俺は」

続けようとした言葉は遮られた。

「…さっきのは聞かないことにするから。

男色なんて最悪だぞ。」

低い声で言われた。

「だけど。」

「良いじゃないか？

聖がどれぐらい精神力があるか養うためにもいいんじゃないか？」

「…エレノアはそれでもいいの？」

邪な気持ちであんたを見てもいいの？

「良いも何も私がいんだろ？」

講師が。

それなら現状維持で仕方ないだろう？」

それは俺の気持ち確かめるバロメーターになるんだからとエレノアは言ったんだ。

俺は自分の理性と精神力を自ら試すようなことになってしまったんだ。

その日は何だかぐったりしてしまつて。

俺はエレノアがせっかく言ってくれた言葉に頷いた。

「なあ。さっきの言ったことほんとに良いの？」

若干情けない声を出す。

エレノアはクスクス笑いながら。

「疲れたんだろ？そこで寝ろよ。」

ベッドは明け渡すってさっきから言ってるだろっ？」

「でもエレノアは？」

エレノアはさらにクスクス笑いながら。

「全く。一緒に寝てお前の理性試してほしいか？」

そう言った。

俺が情けない顔でエレノアを見ると。

真剣なまなざしで。

「大丈夫。私は下に布団敷くから。」

まさかそれを襲うようなことはしないだろうっ？」

「うん。」

素直に頷いたんだ。

そっか。

エレノアはキャパシティが広いんだ。

そのうち俺は眠りに落ちた。

エレノアがいつまでも俺の肩をトントンと叩いて寝かしつけてくれたのを覚えてる。

朝になつて。

目が自然と覚めると。

エレノアが眼鏡をかけて真剣に魔法書を読んでる姿が見えた。

「エレノア。おはよう。」

「おはよう。聖。」

「エレノア。昨日はごめん。」

言わなくてはならなかった謝罪は。
口からついて出て。

エレノアは魔法書から目を上げて。

「…もういいから。」

「気にすんな。」

「でも。」

精神的凌辱は目に見えないから。
深く傷つけてもわからないから。

「良いつて。昨日も言つたらう？」

「あんたが私を好きでも精神力磨くには一緒にいる方がいいかもつて。」

「私だつて力では負けるかも知れないけどそんなに柔じゃないんだ。」

「そしてエレノアは微笑み。」

「腹減つただらう？」

「とりあえず食堂に案内するからシャワー浴びて着替えろ。」

エレノアはそう言って再び魔法書に目をやったんだ。

「さつきからえらくご執心だな。」

俺はエレノアに言われたとおりシャワーを浴びて。

着替えを済ませて居間？に戻るとまだエレノアは魔法書を見ていたから。

そんなエレノアの後ろ姿に声をかけたんだ。

「そうか？」

魔法習得するならこんなもんだろ？」

「でも読んでるのって黒魔術？と白魔術の相違点って？」

エレノアはそう言う俺を見つめ。

「魔法は人の心が映るんだ。」

悪い心だと黒魔術になって。

人を傷つける道具に為り得るんだ。」

俺はそう言うエレノアに疑問をぶつける。

「エレノアは空を飛んだり瞬間移動？とか出来るの？」

「空は飛びたいとも思ったこと無いし。」

瞬間移動もアスカは出来るけど私は魔力が足りないらしくて出来ないんだ。」

「な〜んだ。空も飛べないんだ。講師なのに。」

俺がそう言つとエレノアは少し眉根を上げたけど何も言わなかった。ただ一言。

「空を飛べる講師が良いんなら私が掛け合っが？」

「だ〜〜か〜〜ら〜〜」。

俺が言ってるのはそういうんじゃない。

俺はエレノアが講師が良いの。

ただ空を飛ぶ魔法は教えてもらえないなら自分でやるしかないじゃない？って思っただけだつてば。」

「…聖が望めば空を飛ぶ魔法だつて教えることぐらいはできるが？」
眉根を寄せたままエレノアは言った。

「えっ？」

「魔法つていうのは本人が望んでどれぐらい魔法の素質を持つてるかで決まるから。」

技術はなくても私みたいに知識で教える講師と両方伴った講師がいて。」

知識がなくて魔法が使えるのはアスカみたいな奴だけだ。」

「アスカの魔力はやっぱりかなりエレノアより上なんだ？」

俺が問いかけると。

厳しい表情を浮かべ。

「…アスカは魔法の怖さを知らなすぎるんだ。」
そう呟いた。

「…じゃあ話はこれぐらいにして行くぞ。

食堂に案内する。」

何だかエレノアは話を中途半端のまま無理やり終わらせた気がして。

俺は頷けなかった。

「エレノアはアスカを嫌いなんだ？」

ちよつと鎌をかけてみた。

エレノアはビツクリしたように顔を上げて。

「昔からちよつと苦手かもな。」

そう言うから。

「へえ〜？」

先を促すように仕向けてみると。

「…そいえば聖は私の顔が好きなんだろ？」

アスカなら私より魔法使えるし空も飛べるし女だし。

良かったらアスカ本人に掛け合っても良いぞ？

それならきつとアスカも喜ぶだろうし？

聖の事はきつとアスカも好みだと思っぞ？」

エレノアが饒舌になるとき。

それは必死で真相を隠したいとき。

昨日の今日だけど気づいたことだった。

無理に微笑み言葉を紡ぎ。

俺の心の琴線を逆撫でする。

「そうだ。そうしよう。」

私もアスカに直接掛け合ってみるから。

アスカもきつと聖みたいにかっこいい男なら二つ返事だろう。」
俺は堪らず。

「誰がそうしてほしいって言った？」

勝手に話進めんじゃないやねえよ!!!」

思いの外低い唸るような声が出て。

エレノアは俺を見上げた。

その瞳に俺は映らず。

俺は思わずエレノアの肩を掴んで。

「アスカに何かあるんだろ？」

感情は抑えきれない。

また傷つけそうぞ。

「答えるよ!!!」

昨日から今までエレノアは自分が言ったんだぞ？

俺の講師になるから。

面倒見るからって。

それを今さらまたアスカに講師になってもらった方がいいってどうかしてるんじゃないのか？」

また押し倒しそうぞ。

俺が悔しかったのはエレノアが途中まで話をして突然自己完結して終わったことと。

また繰り返し俺の感情を逆撫でしてきたことと。

エレノアは瞳に辛そうな感情を映して。

「……ごめん。」

それだけ呟き。

俺の手を引いたんだ。

「ごめん。頭がぐちゃぐちゃになって。

整理出来たらちゃんと話すから。」

エレノアが触れたところから体温が伝わってくる。

俺は逆にその手を引き返して。

口唇を寄せた。

「…あんまり俺の感情を逆なでしないでくれるか？」

俺は触れるか触れないかのキスをエレノアの手の甲に送り。

エレノアが真っ赤になったのを見てやっと満足したんだ。

そして気づいたこと。

エレノアは俺の気持ちにこたえないけど。

俺の事は嫌がってないということ。

それだけで今は満足だった。

その日の夕方本部から連絡があつて。
部屋を交換するという当然の通知で。

連絡者に連れて行ってもらつた先の部屋は。
今までのエレノアの部屋を少し広くして。
ベッドを入れて。
それだけだつた。

別に期待してたわけじゃなかつたけど。
俺は連絡者に掴みかかつたんだ。

「これはいつたいたいということだ？」
「どうもこうもここしか空きがなかつたんだ。
嫌ならエレノアとの講師解消して他の部署に移ればいい。」

洗面もシャワー室も狭くて。
だけどそう言われて俺はぐっと我慢したんだ。
エレノアとの講師解消は嫌だつたから。

「アキヤも物好きだとアスカが言つてた。
エレノアのどこが良いんだ？」
「べつつに。
エレノアだからつてわけじゃなくて。
見放したらかわいそうだろ？」
それだけだ。」

そこに運悪くエレノアがお約束のように現れて。

連絡者は鼻でせせら笑い。

「それじゃ。まあ仲良くな。」

そうポンポンとエレノアの肩を叩いて部屋を出て行ったんだ。

エレノアは何も言わなかった。

ただ俺を一瞬見つめ。

「聖のベッドだけが入ったような部屋だな。」
そう呟いた。

エレノアの荷物はホントに少なくて。

片手で持てるほどの量しか無くて。

何だか悲しくなった。

「あの。エレノア。」

さっき言ったこと…」

「ああ。かわいそうな私と一緒にいてくれるってやつ？」

皮肉交じりにそう言うエレノアは。

諦めの眼差しで。

「あの。」

「聖に言っとくけど私は決して可哀想ではないよ？」

私は望まない主義だからアスカに押されて色々損してるかも知れないけど。

でもアスカが持ってないものたくさん持つてるつもりだから。

だから魔法書見るんだよ。

人より魔力が劣ってるなら知識を磨かなきゃ。

私はそれでいいような気がするんだ。」

人の助けが欲しいとか。

人に媚を売るとか。

「そうじゃなくて。」

俺が言いたかったのはそうじゃなくて。」
語尾を強めて言った。

「俺怖いと思っただんだ。」

気持ちが本部にばれるのが怖いと思っただんだ。」

エレノアに対する気持ちは嘘じゃないけど。

嘘じゃないからなおさら男に惚れるだなんてどうかしてるって言って講師解消強制的にやられたらきっと立ち直れないから。」

エレノアはそう言う俺に。」

「怖い…か？」

「冗談だろ？本部にばれるような馬鹿なことするつもりがあっけそう言ってるのか？」

ばれるわけないだろ？」

心まで本部は縛れないんだから。」

「エレノア……」（泣）」

俺が情けない声出すと。

「でも聖は私を裏切らないんだろ？」

そう誓ったじゃないか。」

確かにそう誓ったけど。

だけど。いつ暴走するか。（泣）」

「でも気をつけるよ？」

本部の人間には稀に心読みの魔法が使える奴がいる。

そいつには考えも何もかもがもろバレだからな。」

エレノアの一言に俺は
何か引っ掛かったんだ。

翌日から俺はエレノアに付きっきりで白魔術と呼ばれるのから教えられた。

エレノアの教え方は学校の先生よろしく理屈から入るから不真面目な俺はそんなことはすっ飛ばして教えてくれたらいいのにと密かに思ってた。

でもエレノアは侮れなくて。

まあ。侮ってたわけじゃないけど。

俺の気持ちなんかすぐにバレて。

バレた瞬間。

エレノアは静かに言った。

「…やっぱり講師替わってもらった方がいいんじゃないのか？」

そう言われ俺は目を白黒させて。

あたふたして。

「私は人に教えるのは向かないんだ。

退屈だろうと思うし眠くなるのも良く判る。

だけど聖が望んだことなんだから少しは我慢しても良いんじゃないかって思うんだが。」

エレノアはそう言って深いため息をつく。

「でも理屈は良いとかって思わない…よな。」

俺がそう言つとエレノアは深いため息をつきながら。

「…アスカみたいになりたいならアスカに習えばいいって言うてるだろう？」

私はアスカの理屈抜きの教え方には反対だ。

魔法を甘く見るんじゃないって思う。」

「理屈ってそんなに大事なの？」
俺が呟くと。

「確かにアスカの教え方はうまくて。

アスカに習った生徒は大体魔法習得は早くて。

即実践向きだ。

ただ以前にも言っただろう？

黒魔法と白魔法相反する同じ作用の魔法だ。

理屈を知らなければきつといつか破滅するよ。」

エレノアは辛そうに俺を見て。

「…聖はMR使えるだろう？」

そう言った。

俺には何の事だかわからず。

「えっ？」

聞き返した。

「MR。マインドリーディングの略だ。

聖は確か私と初めて会った日。

私の名前が私が名乗る前に頭に響いたろう？」

そう言えば忘れてたけど。

初めてエレノアに会ったとき。

頭に響いたのはエレノアの名前だった。

「ああ。たまに予知みたいな感じで頭に答えとかが響くことはある
ような？」

「それがMRだ。

心で思った他人の声が聞こえるように判るんだ。

それが白魔法だとすれば相反する黒魔法はMCと言って。」

「…もしかしてマインドコントロールとか？」

俺が続けるとエレノアは頷いた。

「そう。理屈を抜かして学ぶと黒魔法を習得する確率が高いんだ。

強大な力を持つのは習得する上ででは必要かもしれないけど。

でもそれを結局は制御できなくて黒魔法が暴走したら止める術を持たない奴は破滅しか道はないんだ。」

マインドコントロール。

それは洗脳。

人が望む望まないにかかわらず実行させる力。

俺が絶句するとエレノアは。

「判つたる？」

もしこのまま講師が私でいくなら面倒でも理屈から叩き込ませてもらう。

それが嫌ならよそへ行け。

私は痛くもかゆくもないんだから。」

そう言った。

すべては俺の行く道だから。

すべては俺の決定だから。

エレノアは吸いこまれそうな瞳で俺を見つめていた。

エレノアの叫び 1

エレノアは凄く禁欲的だった。

寝る・食う・シャワーを浴びる等の生きてくのに最低限必要な行為以外は魔法書を読んでいた。

俺に稽古をつける時間もちゃんと決めていて。

それ以外は俺とも必要最低限のこと以外は口も聞かない。

同じ部屋で。

同じ空気を吸って。

同じように生きてるのに何だか悲しかった。

「なあ。エレノア。」

呼びかけてみても顔すら上げないエレノアに焦れて。

「なあって!!!!」

呼びかけを大きくして。

そしてエレノアに視線を合わせてみた。

「…何だ？」

エレノアは胡散臭そうにこっちをやっと見て。

「エレノアは楽しみは何かないの？」

俺は呟いてみた。

するとエレノアは馬鹿らしいという表情で俺を見て。

「MRで心読んだらいいだろ？」

明らかに挑発してる言い方で。

俺はそれが気に食わなくて。

思わずエレノアの腕を掴んで引き寄せたんだ。

「エレノア。煽るなって。」

俺は何だか本当に悲しくて。

魔法書以外興味はないエレノアに。

「腕放せって。痛いだろうが。」

エレノアは引き寄せても遠くて。

真っ直ぐ俺を見上げる瞳は綺麗で。

だけど直ぐに逸らしてしまう。

「こっち向けよ!!」

俺は思いのほか怒ってたみたいで。

俺は腕に力を込めた。

また視線を上げるエレノアに俺は焦れて。

キスしようとしたんだ。

でも。

でも。

無理だった。

頭に響いたんだ。

このままじゃ終わってしまうと。

悲痛なエレノアの叫びが。

エレノアの叫び 2

「エレノア？」

俺が掴んでる腕は小さく小刻みに震えていた。

「エレノア？」

近づいてもう一回呼んでみると。

「…今MR使っただろう？」

やっとの事で声を出すエレノアは。
俺が頷くのを見て。

「…魔力が抜けるから判るんだ。

で。私の何を聞いた？」

「ただ終わってしまっただけ。」

俺は観念してそう伝えた。

MR使って本人にばれるなんて思いつきもなかった。

今までは俺は外で声が聞こえたときもMR使ってたのかもしれないけど。

それで本人にばれるなんて考えてなかった。

でも思えばエレノアだって魔法使えるからそれに敏感でもおかしくはないよな。

「ああ。もう。」

エレノアは俺の答えを聞いてそう言った。

「2度と私の心読むんじゃない。

必要ならちゃんと話すから。」

エレノアは俺に掴まれた腕を見て。

「つてか私がお前を煽ったのか。
済まないな。」

これ。放してくれるか？と上目づかいでまた俺を見るから。
俺はドキンと鼓動が速くなつて。

「済まないつてエレノアはそう言っけど煽られた俺はどうすればいいんだよ。」

不誠実な俺はこんなに我慢を強いられることもかつては無かつたら。

腕は放さず。

少し力を込めて。

そう言つと。

エレノアは俺を見つめたまま。

「判つた。今回は私が悪い。」

「じゃあ欲求不満の発散の魔法唱えてやるからそれで許せ。」

「魔法つて？」

「良いから私の腕を離して目をつぶれ。」

俺は仕方なくエレノアの腕を離し。

目を閉じた。

その時だった。

ふわりと薫の香りがして。

俺の周りを包み込み。

エレノアの腕の中に抱きしめられて。

額に口づけを受けた。よくな気がした。

から。

目を開けるとエレノアがビックリした表情で俺を見て。

真っ赤になりながら。

「！！！！眼を開けるのは反則だ。」

そう言うエレノアがすっごくかわいくて。
愛しくて。

俺はエレノアに抱きしめられたまま言ったんだ。

「どうせなら口にくれたらよかったのに。」

額って純なガキじゃあるまいし。」

にやにや笑いながら言ったのが気に食わなかったのかエレノアは俺を突き飛ばして。

「うるさい！！」

せっかく人が勇気振り絞ってやってやったのにもう2度としてや

らん！！！！（怒）「

でも俺は嬉しかったんだ。

あんまり嬉しくて。

エレノアを引き寄せたんだ。

吸収 1

エレノアは「放せ。」と腕の中で暴れるけど。俺はそのエレノアの耳に口をよせて呟いた。

「俺は外ではこれでも結構モテたんだよ。

だけど人をこんなに好きになったのはエレノアが初めてだ。それは本当で。」

俺は不誠実な人間だから不誠実な彼女と快樂におぼれて。それでいいと今まで思ってた。

だって気持ちいいこと大好きだし。

我慢するのは似合わないし。

だけど心をほしいとは思ったこと無かった。

今はエレノアの心が欲しいと思ってる。

それは通じ合う心。

一番エレノアが信用してくれる人間になりたかった。

俺がそう呟くとエレノアは暴れるのをやめて。

「…信用はしてる。」

そう静かに言った。

「えっ？」

「私は信用した人間とじゃないと一緒にには居られないから。

そう言う意味では信用してる。聖の事。」

エレノアはそう言って。

俺の腕から抜け出し。

「だけど私をまた襲おうとか思ってるなら今のはナシだ。どっちがいい？」

私をまた襲うかもしれないなら私もお前を信用しない。お前の自制心の問題だ。」

「うっうっうっ。エレノア〜（泣）」

「情けない声を出すな。」

でもエレノア。

俺思ったんだ。

エレノアは俺が一線を超えない限りきつと許してくれて。きつと信用してくれるって。

何だかそれでいいような気がした。

本当にそれでいい気がしたんだ。

翌日。

滅多に会わないとエレノアが言ってたアスカが丁度食堂に来てた。俺は珍しくエレノアとは別行動で。

アスカがいるなどは思ってたけど別に声をかける義理もないし放っておいたら。

アスカがつかつか俺のところにやって来て。

「兄貴とはどうなの？」

単刀直入に聞いてきた。

見れば見るほどアスカはエレノアそっくりで見間違っただけだ。俺にはなぜか違って見えた。

それは挑戦的な瞳だとか。

男好きのする体だとか。
不敵で魅力的な笑いだとか。

「仲よくしてるよ。」

俺にしては珍しく冷たく返したら。

「兄貴魔法教えるの下手でうるさいでしょ？」

昔からなんだけど理屈主義者だからうるさいのなんのって。

「アキヤさんも大変だっつてうちのパートナーとも言ってたんだ。」

「あつそう。」

「それに兄貴の奴お固い人間だから未だにキスすらしないんだ。
笑ってやってよ。今度部屋に帰ったら。」

アキヤさんももし欲求が溜まったら私のところ来なよ。

やらせてあげるよ〜。

兄貴が言っただけと私の顔が好きなんだって？
私もあんたみたいに良い男なら大歓迎だよ。」

俺は珍しく。

本当に珍しく吐き気がしたんだ。

目の前でうるさく喚くアスカに嫌気がさしたんだ。

顔が同じでもこんなに不愉快になるものかと思ひ。

俺は立ち上がった。

「ちょっと気分が悪いから部屋に戻る。」

そう冷たく言い放ったんだ。

吸収 2

部屋に戻ると先に戻ってたエレノアが相変わらず魔法書を読み耽っていた。

…本当に気分が悪い。

俺がふらふらと自分のベッドに戻ろうとしたとき。

珍しくエレノアが視線を上げて。

俺を見た。

でも俺にはそんな余裕無くて。

ただ苦しかった。

吐き気がした。

気分が悪くて。

「聖。どうした？」

珍しく声をかけてくれたエレノアでさえ鬱陶しく思えて。

「ちよつと静かにしてくれないか？」

気分が悪いんだ。」

俺にしてはエレノアに対して本当に冷たい言い草で。

自分でもぞつとするぐらいの冷たい声だったから。

エレノアは意に介した風もなく。

珍しく俺のベッドの傍らまで寄って来て。

何か言葉を紡ごうとしたとき。

俺は信じられないことを言ったんだ。

「それ以上俺に寄るな！！犯すぞ！！！！」

言ってから気づいた。
とんでもないことを言ったことに。

エレノアは怯まなかった。

「やれるもんならやってみればいい。」

ため息交じりにそう言うから。

俺は急に悲しくなつて。

「…ごめん。」

ついて出た言葉は謝罪だった。

「聖。何があつた？」

エレノアは俺の傍らで。

優しい声を出してくれた。

「…アスカに声をかけられて。」

俺は声を出す。

「アスカの言うこと聞いてたらなんか気分が悪くなつてきて。もちろん誘われたとか余計なこととは言わないけど。」

「アスカが下にいたのか？」

俺が頷くと。

エレノアは俺に視線を合わせ。

「聖。私の心読んでみる。」

そう言った。

「えっ？何で？」

もう2度とMRするなつて言つたくせに。

此処まで出かかった言葉を思わず呑み込んだ。

「良いから読んでみる。」

「私はお前が喜ぶこと思ってるから。」

気分は悪かったけど意識を集中したら。

エレノアの声が聞こえてきた。

よく我慢したって。

「よくがまんした？」

俺がそう呟くとエレノアはにっこり笑って。

「…大丈夫みたいだな。」

そう言った。

「ってエレノア？」

俺が問いかけるとエレノアは。

また微笑み。

「順を追って話すから。」

そう言ったんだ。

夢魔 1

「まず神官講習ってコレな。」

実は自衛とか本部は言ってるけど単なる独裁者の集まりに過ぎない。」

エレノアは俺の手を握って。

その先から魔法を唱える。

「私が1番懸念してるのは今のところ強大な力を持つてるのがアスカ1人なこと。」

アスカが1人ならまだ力は強大とは言えないが。

そのうちアスカの教え子が力を持つて。

きっとこの国はアスカに逆らえないようになってきつと滅びる。

国なんか滅びても別にいいじゃんって思うかもしれないけど。

私たちはそれでいいかもしれないけど。

今生まれた子たちの未来はめっちゃくちゃになるんだ。」

エレノアが唱えた魔法はヒーリングだった。

指先から温かくなってきた。

気分も何だかよくなってきた感じで。

「アスカは何者なの？」

それは当然の疑問で。

「アスカは私の妹で悪魔に魂を売った人間で。

永遠に年をとらない厄介な人間だ。」

「何だか信じられないんだけど？」

悪魔に魂を売ったとか。

年をとらないだとか？

「そうだよな。」

「普通はそういう反応だ。」

エレノアはそう言っただ。

「アスカは聖に誘いかけたらう？」

「私に手を出せないなら私の代わりにやっつけてやっつけてもいいよ〜と
か？」

「…凶星で。」

俺は何も言えなくて。

「で。誘いに乗ったとか？」

エレノアがそう言うから。

俺は心外で。

「そんなわけないじゃん？」

誘われたら急に気分が悪くなったんだよ。(怒)

「悪い悪い。冗談だ。」

エレノアはクスクス笑って。

「…アスカが厄介なのは男に誘いかけて夢魔みたいに魔力を吸うんだ。」

「気分が悪いのはひょっとして…？」

その所為かもな。

エレノアは頷いた。

夢魔 2

「ただまだアスカは聖のMRには気づいてないみたいだ。良かったなとエレノアは言う。」

「何が良いつて？（怒）」

全然よくないじゃん。この気分の悪さ。」

俺が怒りマーク付けて怒ると。

エレノアはクスクス笑って。

「アスカは昔から良い男に弱いからきつといつもより勘が鈍ったんだろう。」

良かったな。夢魔みたいに吸魔されて今まで私が教えた白魔法も元から聖が持つてるMRも無くなってるよ。」

「エレノア。笑い事じゃないって（怒）」

「もちろんだ。聖。」

これから気をつけるよ。」

出来ればそのままの方がいい。」

魔法を下手に使えると他でアピールしないようにな。」

エレノアが握ってくれてた手を握り返して。

「もし今度アスカに誘いをかけられたらどうしたらいい？」

試すような言葉を言ってからしまったと気付く。」

エレノアは不幸を自分だけで背負ってるような奴だから。」

案の定エレノアは眉根を寄せて。

「…聖がアスカと寝たいとかそう思うなら行けばいい。」

私にはそこまで干渉できない。」

ただ間違いなく吸魔されることだけ覚えてればいい。」

「それって？」

「だから私にはそこまで関係はないって。」

エレノアの1番苦手な話題はこういうことだった。

純粹でウブで子供みたいな心しか持ってないから。

「それは俺がエレノア好きなの判ってるくせに容認するってことなのか？」

「容認って…。」

エレノアは口ごもって。

目を背ける。

俺はまた焦れて。

「俺はエレノアが好きなんだけど？」

もう1度告げてみた。

「男色は最悪だって何回言ったら判るんだ？」

エレノアはまた向き直って言った。

「私には聖に何もしてやれないしする気もない。

何回私はそれについて答えた？」

それが不満なら講師解消だって何回言ったら判るんだ？」

「違う!!!」

俺が声を上げると。

「俺はただエレノアの気持ちを聞いてるだけなんだ。

エレノアは俺にどうしてほしい？って聞いてるんだ。

俺はエレノアが嫌がることはしたくないから言ってるんだ。

もし今度アスカが誘いをかけてきたら…。」

エレノアが遮って。

「私の気持ちは出来れば。」

本当に出来ればアスカの誘いには乗らないでほしい。」

俺はそれを聞いて何だか気持が晴れた感じがして。

嬉しくてエレノアを抱きしめたんだ。

「判った。誘いには乗らない。

付いてもいかないから安心しておいて？」

俺これでも自制心の塊だから。」

そう言う俺を見て。

やっとエレノアが笑った。

俺の気持ちにはこたえないエレノアだけど。

エレノア自身は俺の事を多分好きでいてくれるはずだから。
やっと確信が持てたから。

心で好き。

多分それ。

元々俺ってば不誠実なものだから。
不誠実を肯定してるわけではないんだが。

女にモテるのは嬉しくて。

昨日アスカに声をかけられてからこっち。

食堂にエレノア抜きでいれば良く声をかけられるようになった。

「アキヤさんってアスカも言ってたけどカッコいいよね。」
とか。

「同じ腕輪してほしい。」
だとか。

俺は基本装飾系は動きづらいから着けないんだけど。

それは結構高価で。

俺が好きなブランドの銀のブレスだったから。

何だかくれるって言うなら貰ってもいいかななんて思ったりなんかして。

結局見返りにキスの一つでもすればその女も満足げだったから。

俺は嵌めたブレスの腕でその女を引き寄せ濃厚なキスを一つしてやった。

心と欲望はやっぱ別もんなんだなってこっぴどくとき思う。

いくらエレノアを心で好きでもやっぱ女の方が良いに決まってるし。

もちろんエレノアが俺の全部を受け止めて体さえ差し出してくれるってなら別だろっけ。

それはあり得ないしそんなエレノアじゃないし。
しかも男の体に元々興味はないから。

アスカがエレノアならなってよく思うし。

しかも思ったことは。

濃厚なキスで思ったことは俺ってばやっぱ飢えてるってこと。
男ばっかの神官講習は辛すぎだ。

そして部屋に戻りいつも通りエレノアがいて。

俺に視線すら合わせないエレノアに。

何だかとっても不快な思いがして。

それはエレノアに向いたんだ。

「俺ってば結構モテるらしいよ。」

一言そう言えば何かが返ってくると思ってた。

「…あっそう。」

エレノアは何をするわけでもなくベッドに座ってて。

視線は下を向いたままで。

エレノアの答えは肯定でも否定でもなくただ同意？しただけに見える。
て。

「あっそうって？」

他になんか言うこと無いの？」

俺は焦れてまたエレノアに食ってかかった。

「…私は聖が講義をちゃんと受けてくれればそれでいい。

プライベートで何をしようが関知しない。

そう言っただろう？」

エレノアは下を向いたままベッドに横になった。

「俺。エレノアを好きなんだよ？」

不誠実だとか何とか責める気もないの？」

本当は責めてほしかった。

好きでいてくれるって言葉でほしかっただけなのに。

「何とか言えよ!!!エレノア。」

俺は不誠実だって。

責めてよ。

横っ面ぐらいはり倒してよ。

せめて心では好きだという証見せてよ。

「…私はそうやって試されるぐらいなら一生聖なんか好きにならな
い。」

お前が好きだって言えば言うほど信用なんかしない。」

その言葉は。

今の俺にとって「地雷」だった。

Platonic Love 2

俺は言葉が欲しかったただだったのに。
エレノアは地雷を踏んだ。

「ああ。そうかよ!!!」

思ったより冷たい声が出て。

「お前にとって俺は単なる生徒だし？」

その生徒が好き勝手しても関知しないってそういうことなんだろう？

昨日はああ言ったけど俺やっぱアスカの方がお前より好きだわ。

あいつ胸でかいしお前の顔してるし。

何より女だもんな。

もう魔法なんか知ったこっちゃねえや。」

俺はそうエレノアに言って。

乱暴にドアを閉めて。

アスカに会いに行ったんだ。

取り残されたエレノアが何かつぶやいたこと俺は聞いてなかった。

アスカは探さなくてもすぐに気配で判り。

俺はアスカに会った途端抱きしめたんだ。

「なに？気でも変わった〜？」

昨日はあれだけ吐き気さえ催したアスカの声にも。

俺は魅力を感じて。

… 快樂におぼれた。

夢魔みたいにアスカは多分俺の魔力も吸い取ったに違いないけどそんなことはもうどうでもよかった。
好きな時に抱けるエレノアの顔をしたアスカが傍にいればそれで良かったんだ。

悪魔に魂を売ろうが知ったこっちゃないって思った。

若ければ若い分その分肌はきめ細やかで。

ホント俺に抱かれるためにアスカっているんじゃないかって錯覚を起こすぐらいに魅力的で。

俺がアスカと快樂におぼれてる間。

エレノアは相変わらずだった。

たまに食堂で顔を合わせたり。

まあ講師だから毎日魔法の講習では会うんだけど。

もう何も言わなかった。

俺に口うるさく論理が先だと魔法を教えることも無くなり。

ただ俺が聞いたことに答え。

ただ少しの概要のみで魔法を教えるようになった。

もう瞳に俺を映さないし。

欲求不満が取れた俺にはエレノアを何で好きだったのかさえ思い出せないぐらいだったから。

元々男を好きになるなんてきつと異常だから。

もうエレノアを引き寄せたいとか。

抱きしめたいとかも思わなくなっただ。

そしてエレノアも。

「講師を替わればいい。」とか。
そんな無駄なことと言わなくなった。

ただこの半年間が無事に過ぎればいいとそう願ってるような素振り
しか見せなくなった。

Platonic love 3

もっばら俺はアスカの部屋に入り浸りだったんだけど。
流石に着替えとかもいるし。
一旦戻ることにしたんだ。

あれからエレノアとは毎日顔合わすけど必要以上に口をきくこともないし。

まあそれは前からだけど。

欲求が解消された今。

何だかすつきりした気分で。

エレノアがいてもいなくても。

俺は着替えを取りに戻ったんだ。

部屋に戻るとエレノアは相変わらず魔法書を読んでいて。
ドアの開閉の音には少しびっくりしたみたいだったけど。

俺の姿を見た途端視線をそらせたんだ。

「俺お前に遠慮して躊躇してたけど。」

俺は言葉を紡ぐ。

「早くアスカを抱けばよかった。」

そしたらイライラせずお前に煽られることもなく魔法だって使えるようになったのに。」

エレノアは顔も上げない。

「アスカってさ。」

エレノアの顔してるからすげえそそるんだよね。」

敢えて下世話な言い方をしても。

「だからもうお前の顔見ても何とも思わないから安心すれば？」
エレノアは何も言わなかった。
ただし視線だけ上げて。

「荷物も引き揚げてアスカの部屋に送ってやるよ。
あと講師の件だけでももう少しだけアスカにバトンタッチする手
続きとつたから。」
そう言葉を紡いだんだ。

エレノアはそれだけを言っただけでまた視線を魔法書に下ろした。

「何勝手に決めてんの？」
俺のセリフはそうだった。
この部屋を飛び出した瞬間から俺はエレノアの手を自分から振り払っ
たのに。

講師はエレノアが良いと思ってた。

「俺エレノアに魔法は教えてもらいたいんだけど？」
「…聖アキヤさん。」
それは虫が良すぎってもんだ。
私とはもうやっていけないから。
アスカが良いからお前は飛び出たんだろう？
お前に2人も講師は要らない。
男の私より女のアスカを取ったのはお前だ。」

それは事実だけれども。
ただど納得いかなかった。
「何で？」

「…本部の決定は絶対だ。」

私は少し予定が狂っただけで初めてお前と会ったあの部屋に戻るだけだ。

その何が気に食わないんだ？」

このままでは滅亡は近い。

エレノアの心の声が俺に響く。

…このままではもうきつと…。

「まさか…。」

俺は思い当たる節があつて。

「まさかエレノア。」

あの部屋に幽閉されてるのか？

閉ざされた生きるために最低限必要なだけのものがそろつてる部屋。

「…そうだとしてもお前に何の関係がある？」

エレノアは視線を上げないままそう呟いた。

Platonic love 4

エレノアと初めて会った日のこと思い出した。
俺は嫌がるエレノアに強引について行って。
強引に部屋に上がって。

部屋を見て。

あまりの必要なものしかない部屋に愕然として。
きつと窓もなくて。

あるのは魔法書と洗面とシャワー室と薄いベッドと。

しきりに嫌がるエレノアを強引に引き寄せて俺は何をした？

「聖アキヤさん。

荷物は送ってやるから必要なものだけ持ってアスカのここに行っ
てやれ。」

もう聖とは呼ばない。

冷たい言葉だけ紡ぐその唇に。

俺はとんでもないことをしてしまったと気付く。

不誠実な俺にはそのことすら判らなくて。

「エレノアは俺がアスカと寝たから怒ってるのか？」

思ったことを口にすれば。

「何故だ？」

私には関係ないだろう？」

冷たい感情が読めない言葉を紡ぐその唇は。

思った以上に滑らかだった。

「私は何回も言ったはずだ。

お前が誰と何をしようが私は関知しないし必要とあれば講師だつて解消するって。」

俺は何だか悔しくて。

そう言うエレノアの腕を掴んで。

強引に自分の方を向かせて。

「初めに裏切ったのは俺だけだ。

煽ったのはお前で!!!

エレノアが俺の気が済む言葉さえくれれば!!!!!!」

そこまで言った時初めてエレノアが俺の頬をたたいたんだ。

「サイテーだ!!!おまえは!!!

その程度だったんだろう?私を好きだって言うからどんなもんかと思っただけだ。

私には一生判らないし判りたくもない!!!

男なんだから当たり前だろう?

後悔が怖いんだよ!!!!!!」

どれだけ私を貶めれば判る?

エレノアはそう呟いて。

「早く出て行けよ。お前なんか顔も見たくない。」

そう言うエレノアの表情は涙でぬれていた。

俺は二の句が告げなくて。

エレノアに掴まれ外に放り出されても。

立ち尽くしたままだった。

消息 1

エレノアに叩かれた頬は痛くて。
さっきまでは俺が優勢で。

気分は晴れていて。
快樂におぼれて魔法も使えるようになってアスカってサイコーじゃ
ん？って思ってたのに。

エレノアに実際放り出されただけでこんなにダメージを受けてる。

銀の腕輪は何故かきつくて。
腕が締め付けられる感じがして。
外してしまった。

仕方なく俺は食堂に戻り。
1人みんなと離れて座った。

エレノアとなんかいつ関係が切れたって良いつてさっきまで思っ
たのに。
手を伸ばしても絶対握り返してくることなんかない男なのに。
何だつて俺はこんなにショックを受けてるんだって思う。

そしてさっきのセリフ。
「お前！！サイテーだ。」
それがその次の言葉を倍増させた。
「お前なんか顔も見たくない！！」

俺は不誠実で。

こんなセリフ吐かれてもこんなにダメージは受けないのに。

相手がエレノアだから？
そう思うと合致する。

だけどそれ以降駐屯地でエレノアに会うことはなかった。

エレノアはあの後。

講師を辞めてどこかへ行ったとアスカが教えてくれた。

俺はあれだけエレノアのセリフでダメージを受けたくせに。
さびしくて。

エレノアと同じ顔をしたアスカとの関係は切れず。

結局魔法も一通り理屈抜きで覚えて。

その時には半年が過ぎてたんだ。

瞬間移動だって空だって飛べる。

俺が当初最も望んでた形での講習を終えて。

俺が住んでる土地で町を守る警察の魔法を使える部署に配属された
んだ。

その時は気付かなかった。

世界は破滅へと向かってることを。

そしてエレノアが言ってた意味。

このままじゃもう……………

消息 2

俺はうつすらエレノアはどこへ行ったんだろうとか。思ったことはあったけど探そうとか思ったことはなかった。

だって顔も見たくないと言われるぐらい嫌われて。

最後に見た表情は涙でぬれていて。

探したとしても。

きつと嫌な顔しかされないだろうから。

俺ってホント意気地無しだ。

ため息が出る。

アスカとは元々誠実な付き合いじゃないから。

向こうだってそのつもりで。

魔力を吸い取って。

自分好みの男に調教して。

それから魔法を教え。

講師の役目を終わり。

所属が決まったらもう連絡なんかなかった。

判ってた結果で。

俺が望んでた後腐れのない結果だったのに。

こんなにも心は飢えてる。

最後にアスカと寝たとき。

アスカは意味深なことを言った。

「兄貴は私に全部魔力吸い取らせたから幽閉が解かれたんだよ。もう兄貴はただの人で魔法は使えないから。」

危険因子は排除するのが本部のやり方で私は初めから同意してたんだ。

なのに兄貴の奴下手に逆らうから目をつけられるんだ。

私のようにうまく立ち回って。

「兄貴みたいなのを嵌めるのはすぐだったよ。」

あはははと面白くもないのにアスカは声を上げて笑い。

「兄貴は危険因子で噂を立てられてへらへらしてるから悪いんだ。」

何が孤高の人だ。

単に魔力が弱くて襲われそうになったときに死に物狂いで口封じ唱えただけじゃないか。」

そしてアスカは憎悪の表情を見せた。

「だから私は兄貴のふりをして男を食い物に出来ただけどね？」

アキヤも良い男だったから私の魅力に気づいてくれてうれしかったし。」

ベッドで俺はうつすらそんなことを聞いてたっけ？

ため息は尽きない。

エレノア。

どこにいるんだろう？

強く念じてみた。

もしかしたら魔法を使え瞬間移動すら出来る俺には。

エレノアと念じるだけでそこに行けるかもしれないから。

消息 3

って言うって。

マジでエレノアの居るところに行けるなんて思ってなかったし。

警察の寮から俺は瞬間移動をして。

何処かの町のどこかの酒場にいたんだ。

酒飲みばかりの酒場で。

酒場だから当たり前なんだけど。

気づけば俺はカウンターに座っていて。

酒でも飲みたかったのかよ〜俺〜。と情けなくなつて。

そのこのバーテンが声をかけてくるまで遠い世界に心は行つてた。

「お客さん。何にいたしまししょうか？」

その声に聞き覚えがあつて。

「エレノア？」

まさかなと思いつながら呟いてみたんだ。

そして視線を上げてバーテンを見たんだ。

「お前。エレノアだろう？」

そのバーテンは確かにエレノアの顔をしていて。ただ俺を見ても一切視線すら泳がせなかった。

「お客さん。何かの間違いでは？」

よそよそしい声で。

フラッシュバックするのは俺の記憶。

「お前！！サイテーだ！！！」
最後に見たのはエレノアの涙に濡れた顔だった。
俺は確信があつて。
でもそれはあやふやなものだけだ。

確かにエレノアだと確信できる何か。
それは。

いつもエレノアが肌身離さず持っていた金のペンダントだった。
チラツとそのバーテンの胸元から見えたんだ。
そして俺がそれに気づいたと気づいたバーテンはもう無駄なのに。
胸元を抑えた。

エレノアをいつか頭に来てベッドに押し倒したとき。
俺は酷い凌辱をしてしまった感が拭えなかった。
服を破ったわけでも荒々しいキスをしたわけでもないのに。
その時にちらつと胸元に見えたペンダントがそれだった。

バーテンは俺の感情に気づき。
中へ急いで引ッ込んで行つたから。
俺は急いで酒場の裏に回つたんだ。

アスカによればもうエレノアは魔法を使えない。
ただの人になつたというから。
きつと俺にはもう敵わないはずだから。

そして捕まえた。

フェラー通り 1

「っ！！！！放せ！！！」

力いっぱい抵抗するのは当たり前で。

エレノアにとつてはきつと地獄の再会だったかもしれない。

俺より一回り小さいエレノアの体を捕まえるのも抵抗を封じるのも容易いことではあったけど。

俺は超低音でエレノアの耳元で囁いたんだ。

我ながらやらしいよなとか思いながら。

「あんまり抵抗すると酷くしたくなるぞ。」

「！！！！？やめっ！！！」

耳元はエレノアの弱点だったから。

途端に抵抗は弱くなって。

消えた。

「放せ。逃げないから。」

俺が抱きこんでるとエレノアが呟いた。

エレノアの香りは董の香り。

いつか魔法を使ってくれたときの香り。

抱きこむといい香りがして。

ホント男なんだけど。(泣)

俺はその香りを嗅ぐので夢中で。

エレノアが呟いても手を離さなかったから。

また叩かれた。

「やめろって！！何回不毛だと言ったら判るんだ！！おまえは！！！」

そりゃそうだよな。

耳元で顔を埋められたらそりやくすぐたくて叩きたくもなるよな。真っ赤になって怒るエレノアにでも俺は欲情してる自分に気づいたんだ。

「エレノア。俺半年の講習終えたんだけど？」

だからどうしたと挑むような眼差しのエレノアを俺は少ししゃがんで視線を合わせる。

「魔法でどうにだってお前のこと出来るんだけど？」
怖くない？と暗に聞いてみる。

「たとえばほらっ！！」

明るい声とは裏腹にエレノアの両手を後ろに拘束する魔法を唱える。エレノアは必死に俺を睨みつける。

俺はそうしてエレノアに問う。

もう逃げられないように。

「エレノアの家はどこなわけ？」

瞬間移動で連れて行ってやるよ。」

それともここで恥を晒したいわけ？

そう言つと。

エレノアはさらに俺を睨みつける。

俺はその顔を見て少し心は痛んで。

本当はこんなことがしたいわけじゃなかったのに。

酷いことをしようとしてるって頭では判ってるんだけど。

欲情してる自分を止められなかった。

「フェラー通りの1201だ。」

観念したようにエレノアは言った。

俺はエレノアを引き寄せ董の香りを嗅ぎながら。
ちよっと幸せに浸りながら瞬間移動したんだ。

フェラー通り 2

エレノアの部屋の前に瞬間移動したときのエレノアの驚きの表情は凄かった。

俺をきつと舐めてたから。

瞬間移動なんか出来っこないって思ってたから。

それが自分の部屋の前にそれこそ瞬間で着いたから。

目を見開いて。

俺を見つめた。

「もちろん中に入れてくれるよな？」

俺は念を押す。

エレノアは観念したように鍵を開けた。

そして倒れこむように俺はエレノアを中に引きずり込んだんだ。

「やつ！！！！やめっ！！！」

今度こそどんなに抵抗しようが最後までって思ってたのに。

悲痛なエレノアの叫びと。

また見たような部屋の風景に気を取られて。

エレノアを抱きしめたまま。

だってエレノアの部屋なのに。

エレノア自身があつらえたはずの部屋なのに。

駐屯地の部屋みたくにあるのは魔法書とベッドと二人がけのテーブルと。

多分必要な情報を得るためのパソコンと。

シャワー室と洗面。

他には何もなかったから。

「…エレノア？」

腕の中で放せともがくエレノアに。
聞いてみる。

「エレノア？」

お前本当に何も無いわけ？」

「何も無いってどういう？」

「だって何にも無いじゃん。この部屋には。」

お前が生きる以外に何が出来る部屋だって言うんだ？」

俺が少し腕の力を緩めると。

董の香りがまたして。

「何にも出来ない部屋でいいんだよ。」

私はもう何も望まないから。」

魔法書すらあれだけあったのに。

ほんの数冊しかなくて。

何だかとても悲しくなった。

「良いわけないだろう？」

エレノア自身の部屋なのにどうして？」

空虚な心を再現したような部屋で。

冷たくて。

悲しくて。

「…お前も言っただろう？」

私はもう魔法すら使えなくなつたんだから。
お前がここにいる理由だつてないはずだ。」

エレノアはその言葉を言った時だけ。
瞳を上げて俺を見込んだ。

「俺はエレノアが好きなんだ!!」

何回言つただろう？

何回いっただいこの人に届くまで言えば俺は満足するのだろうか？

「…アスカと寝たつて言つてたな。」

それでどうしてお前は私にその同じ唇で愛を語れるんだ？

私にはそれが理解できないんだ。」

「それは!!!」

「私が煽つたからか？」

私が男だからか？

違うだろう？

私を好きだといুকせにアスカを取つたとしか私には思えない。」

エレノアは続けて。

「お前は私が好きなんじゃなくて私の顔が好きなだけで。」

私の顔をしているアスカがもう少し誠実な付き合いをしてくれたら
それで良かったはずだろうが？」

… 凶星だった。

凶星をさされて息が吐けなかった。

フェラー通り 3

「エレノア!! いるか?」
その時ドアをたたく音がして。

エレノアは俺の一瞬の隙をついて俺の腕から逃れ。
舌打ちをした。

「シャワー室へ行け!!!」
鋭いエレノアの声に押され。
俺はシャワー室のドアを閉めて。

エレノアは急いで頭から水をかぶり。
びしょびしょになりながらドアを開けたんだ。

シャワー室の向こうから声が聞こえ。

「ごめん。シャワー浴びようと思ってて。」

「エレノア。お前判ってるだろうな?

途中で何も言わずに消えるのは反則だと。

「じゃないと皇帝にも……。」

「判ってる。わかっ……。」

エレノアの声が途中で途切れ。

そして息遣いが聞こえた。

その息遣いは俺がよく知ってる。

俺が願ってやまない。

「っ!!! もういいだろ!!!」
息が上がったエレノアの声に。

俺は頭から血が逆流してくるような嫉妬心がめらめらと沸き起った。

「全くお前は誰に操立ててるのか知らないけど。

そんなんだから危険因子だと言われるんだ。

早く楽になつた方が身のためだぞ。」

「うるさい！！用が済んだのなら帰れよ！！！」

「早くシャワー浴びた方が良いぞ？

胸元までぐちゃぐちゃだ。」

更に俺の脳みそは沸騰しそうだった。

大声を上げて出ていきたい衝動を止めるのは難しくて。

「早く帰れ！！！！」

「おおこわ。じゃあまた明日。」

その声がそう言ったのを聞いて。

俺はシャワー室を出て行こうとしたら。

また声がした。

「そう言えばお前の教え子アキヤだっけ？

あいつ逃げたらしいぞ？

アスカが血眼で探してる。

皇帝もおかんむりだ。」

「…それで？」

「噂じゃお前に会いに来るんじゃないかって。

お前あいつの思い人らしいじゃん？

お前ってホント意味判んないぐらい男誘ってたよな。

俺だって別に男色ってわけじゃないし。」

「言いたいことはそれだけなら早く帰れ！！！！」

エレノアはいつもなら俺との会話でその話題になったら。何気なく話題をそらすようにするのが常なのに。

「はいはい。」

全くエレノアさんって怖いんだから。

「じゃあまた明日な。」

ドアの閉まる音と共に俺は堪らずシャワー室から出て視界に入ったエレノアを見て。

血が逆流するかと思うぐらい。

嫉妬した。

「エレノア！なんてカッコしてんだよ！！！」

だってエレノアはまるで犯されたみたいにはるぼろで。

頭から水をかぶったまでは知ってたけど。

扇情的で。

その姿をさっきの奴に見せたかと思うと腹立たしくて。

胸元には金のペンダントと。

唇は妙に赤くて。

ヤバいつて。

ホントヤバいつて思つて。

「…うるさい。喚くな。」

エレノアがそう言ったから俺の欲望のスイッチがまた入ってしまった。

寄つて行ってエレノアの腕をまた掴んだんだ。

フェラー通り 4

「っ!!」

腕を掴んだエレノアは泣いていた。

エレノアの涙を見たのは2度目だった。

「…何で平穩に生きていけないんだ？」

「エレノア？」

「…聖が言いたいことは判ってる。

私だって不誠実だってそう責めたいんだろう？」

必ずと言っていいほどエレノアは自分の性的な部分に話が及んだら話題を逸らして。

それがだめなら何も答えないのが常で。

「今だってみつともないとこ見せたな。」

自嘲の笑みを浮かべて。

「…私は男を誘うらしい。

今の奴が言ったとおりだ。

お前の事も無意識で誘ったのかもな。」

エレノアの瞳から後から後から涙がこぼれる。

俺は腕の中にエレノアを引き寄せて。

抵抗しないエレノアに焦れて。

「抵抗しないなら本気で抱くぞ。良いのか？」

俺らしくなくエレノアに確かめたんだ。

エレノアは何も言わなかった。

ただ瞳を閉じて。
涙があふれてくるのをそのままに。
じっと耐えるようだった。

胸元に手を入れて。

本当に男なんだと実感して。

…出来なかった。

もしかしたら死に物狂いでエレノアが抵抗してきたら頭に血が上って。

酷く抱いたかもしれないけど。

赤ん坊みたいに無抵抗で。

涙を流して。

…男だからじゃなくて。

大切すぎて抱けなかった。

「ちくしよ!!何でだよ!!!」

キスすら出来なかった。

俺の目の前にその唇はあるのに。

その唇は赤くて扇情的で。

抱きしめただけでこんなにも。

欲情は煽られてるはずなのに。

「何で!!!」

…その時だった。

ただ触れるだけのキスをエレノアから受けたんだ。
唇が濡れた。

エレノアは瞳を開けて。

「…お前は優しいな。」

そう微笑んだんだ。

俺の欲情は煽られたままで。

でもエレノアからのキスがとてもうれしくて。
腕の中のエレノアを力込めて抱きしめた。

何だかもうホント嬉しくて。

ただ嬉しかったんだ。

小さな幸せ 1

男に欲情されてうれしい男なんかいないはずで。
男に貞操狙われるなんてきつと地獄で。

抱きしめたエレノアに俺は呟いたんだ。

「せつかくエレノアが優しいと言ってくれたのだからそれに恥じないようにするよ。」

その意味は。

エレノアは顔を上げて。

俺は渾身の精神力をフルで活用させて。

エレノアにべつたりだった腕を離す。

そして。

「抱けなくてもいい。そばにいてくれれば。」

きつと力になるから。

そう呟いたんだ。

節操なしの不誠実な俺にしては上出来の言葉だった。

「…聖。」

ありがとう。」

エレノアは礼を言った。

きつと覚悟を決めてた。

抱かれると覚悟を決めてたはずで。

抵抗をしなかつたはずで。

エレノアにとってどれだけ同性に犯されるということが辛いことか。
俺は初めて思いを馳せたんだ。

たとえ心だけは守れても。
肉体を奪われればきつと。

精神破壊はきつと著しいだろうから。

「早くシャワー浴びてこいよ。

それからゆっくり話をしよう。

アスカの事も今日来たあいつの事もそれからエレノアが講師を辞めたあの日からのことも。

全て話してくれ。」

俺はそう言ってエレノアをシャワー室に追いやったんだ。

犯されたように服も破れてるエレノアを見てるのが辛くて。

俺の邪な気持ちがまた顔を出しそうで。

エレノアはなかなか立とうとしなくて。

俺はそれに焦れて。

「あんまりぐずぐずしていると本当に犯すぞ!!!」

半ば脅迫めいた言葉でシャワー室に追いやったんだ。

エレノアは大きく震えて。

犯されたら敵わないと顔に書きながら着替えを持ってシャワー室に入って行った。

エレノアは茶色い長い髪を持っていて。

白磁器みたいな肌をしてる。

男なのが不思議なぐらいの細い腕と腰で。

背はアスカよりちょっと高いぐらい。

服はいつも生成りの足さばきの悪そうな前開きの上着にジーンズっ
ていで立ちで。

その上着から見えた白い肌に金のペンダント。
もちろん男だから胸はない。

これは触って確かめた。(死)
やらし過ぎる。俺の思考!!

だって男だから仕方ないじゃん？

ホントはさわって確かめるまで実は女だったらいいななんて思ってた
んだけど。

俺の儚い夢は消えた。

そして本当は。

さっきは惜しいことをしたと思ってるのも事実で。

せっかくエレノアも覚悟を決めてくれたのに。

ああ。無駄に忍耐を發揮してしまった。(泣)

小さな幸せ 2

無機質なエレノアの部屋を見渡すと。

1枚だけ写真が飾ってあった。

それはエレノアときつとアスカの写真。

2人とも幸せそうに笑ってる。

「綺麗な奴って小さい時から綺麗なんだな。」

1人こちる。

「聖は幼児にも欲情する趣味があるのか？」

急に後ろから声をかけられて。

俺は別にやましいことをしようとかこれっぽっちも思ってた
けど。

声が上がった。

「げっ！！エレノア。」

「私に欲情するだけで結構異常だから気をつけた方が良いぞ？」

シャワー上がりのエレノアは髪を一つに縛り。

きつちりと肌も見えない服で上がってきてたから。

俺は妙に安心して。

エレノアはニコリともしないけど。

俺は手を伸ばして。

写真を取って。

「これいつ頃のやつ？」

聞いてみた。

「…多分魔法を習い始めたころのやつだと思う。」
「結構かわいいじゃん？お前もアスカも。」

「…嬉しくないんだけど？」
「まあいいじゃん。俺には可愛く見えるってことで。」
「ヤバい会話になりそうな時は敢えて避けて。」

「…ところでおまえはどこから現れたんだ？」
それは至極当然の疑問で。
エレノアは俺の手から写真を取り。
俺の目の前に座って言った。

「どこことは？」
質問の意味が判らなかつた。

「どこへ配属された？」
半年の講習は終えたんだろ？」

「ああ。それが。
警察の魔法使うところ。」
何かエレノアのこと考えてたら瞬間移動してたんだ。」
「それはいつの事だ？」

「さつきじゃん。エレノアのいた酒場に俺現れたろ？」
エレノアは時計に目をやり。
カレンダーに目をやり。

「お前。時間軸を歪めたな。」
そう言った。

「時間軸って？」

「魔法使うことによって1日とか1週間とかの単位で誤差が生じる
こと。」

だから私は言ってただろう？

魔法は白魔法と黒魔法があるって。

白魔法は習得は難しいけど誤差を生まない魔法で。

黒魔法は習得は簡単だけど誤差を生じて最後には体にも異変を感じ
る魔法だって。」

「だってエレノアが勝手に講師下りたじゃん。」

俺の不誠実さが生んだ結果だけどそんな知ってたらアスカにふら
ふらと行かないって。

いくら俺でも。」

と付け足してもエレノアは冷たい視線で。

「ってことはお前が瞬間移動を唱えたのが少なくとも2回。」

…アスカがお前を血眼で捜してるってさっきの奴が言ってたのを
考慮すると…。」

少なくともきつとお前と私の間には半月から1か月の誤差がある
ってことだ。」

「もう！！判りやすく言えねえの？」

俺が焦れて。

先を促すと。

「だからお前の瞬間移動は割合習得が簡単で講師がアスカだったこ
とを考慮すれば黒魔法だったこと。」

例えば今回の場合。私に念じただけで会いに来れたって言ったよ
な？

もしかしたら私のいた場所に行くだけかもしれない。

私はもう生きてないかもしれない未来に飛ぶことだって充分に有
り得るわけで。」

「それって？」

「だから居る筈のない人間がいる筈のない場所に存在するかもしれない魔法だってこと。」

それが黒魔法の瞬間移動だ。

まあ。私も意味が判らなくてお前を試したから危険を犯させて済まなかった。」

俺にはさっぱりだったけど。

判ったことはとにかく瞬間移動は危険だということと。

俺が習ったのはことごとく黒魔法だということだった。

小さな幸せ 3

「さっきの奴はエレノアの何なんだ？」
それは当然の疑問で。

「さっきのはガードって言って。
私みたいに駐屯地の講師をしたことがある人間を見張ってるんだ。」

「でもエレノアはもう魔法は使えないってアスカも言ってたしお前自身も言ってただろう？」

アスカは確かに言ってた。

自分にエレノアは魔力を吸い取らせて辞めていったと。

「そう。あくまで「修行で習得した魔法」はな。」

「それは？」

「潜在能力に秘められたのは持つてるままだ。

お前のようにMR使えたり。

私の場合は白魔法のヒーリングのみだけだ。」

エレノアはこちらを見て。

「アスカの場合は黒魔法の吸収魔法だった。

人によって潜在能力は違うから私みたいに白魔法を潜在能力として持つてる人間は少ないらしい。

だから「危険因子」だとされて無理やり講師にさせられたんだ。

アスカともども。」

エレノアは自嘲の笑みを浮かべ。

「ヒーリングは厄介なんだって。」

危険なんだって。

反逆されたときに敵わなくなるのが怖いから本部は私を監視下に置いて。

正反対の魔法を持つてたアスカを据えたんだ。」

エレノアはアスカが苦手なんじゃなくて不本意なことをしてる自分に腹が立ったと言った。
そして。

俺に望みをつないだと言った。

「お前。白魔法のMR使えるみたいだったから。」
そう言ったんだ。

「白魔法は習得の際香りがするんだ。

私みたいに初めから白魔法を持つてる奴は花の香りがする。」

それを聞いて俺はまた目の前のエレノアに抱きついたんだ。
だってだからかって思ったんだ。

エレノアの首筋から董の香りがするから愛しくて。

抱きつかれたエレノアは体勢を崩して俺が押し倒した形になった。

「！！お前。そのすぐ抱きつく癖止めろって！！！」

「だってエレノアいい香りがするから。いいじゃん。

減るもんじゃなし。」

エレノアは諦めたかのように身をよじった。

「だからかもな。」

エレノアが呟く。

「私のこの董の香りが男を誘うってガードの奴が言った。

私のその気がなくても相手にその気がなくても私のこの香りがす

ればふらふらとするって。

男色じゃなくてもって。」

何だかとても悲しくて。

エレノアはずっと眩くんだ。

抵抗もせず。

俺の目を見もせず。

小さな幸せ 4

エレノアは俺に押し倒されたまま天井を見つめ言った。

「聖。頼みがある。」

「何なりと。」

俺はエレノアの首筋に口づけたまま呟くと。

「…その前に放せ。」

服を勝手に脱がせようとするんじゃない!!」

「だって〜〜。」

俺は気付けば無意識って怖いもんでエレノアの服のボタンを少し外して。

そこに顔を埋めて夢中で香り嗅いでて。

抵抗されると尚更やりたくなるし。

「もう!!!止めろって!!!」

白いエレノアの首筋は本当に誘ってるようにしか見えなくて。ペロツと舐めてみた。

ビクツとエレノアは身をよじって。

俺をにらむ。

「エレノアってば敏感じゃん？」

「かわいい〜。」

真っ赤になったエレノアはそれこそゆでダコみたいで。

「だから放せって!!!」

「そんなん言っても聞こえません!!!」

俺は放す気無かったから。
俺がそう言つと一瞬ホント一瞬だけど。
瞳を大きく見開いて。

「判ったから。」

もし全部無事に終わつたら私を…

好きにしたらいい…。」

そう言つたんだ。

俺はその台詞が信じられなくて聞き返した。

「それって本当か？」

俺が目を合わせると。

「ああ。」

好きにしたらいい。」

そう確かに言つたんだ。

「本当にか？」

俺がエレノアを放す様子が見えないから。

「くだい!!!」

エレノアはちよつと語彙を強めた。

「だってエレノア嘘つきだし。」

俺を適当に丸めこむんじゃないかって思つんだよな。」

俺は不満をエレノアにぶつける。

「嘘じゃないって。」

「だけどエレノア。」

もし嘘じゃないなら何か証明して見せるよ。

その場限りで俺の腕から逃げたいだけなら俺は逃がさないし酷く抱きたくなる。」

それはくすぶってる欲望。
どうしようもないくらい恋い焦がれてる。

小さな幸せ 5

エレノアは弱り果て。

俺の腕を押し返す力も段々尽きてきたみたいで。

さっきの俺のセリフにダメージを受けてるみたいで。

俺はエレノアが口を開くまでエレノアの首筋に顔を埋めたまま待っていた。

さっきのエレノアが呟いた。

「私を好きにしたらいい。」

その台詞がその場限りの事ならば。

俺は気持を弄んだと許さない。

きつと歯止めは利かず酷く抱いてしまっただろうって目に見えてる。

だって俺はエレノアが好きなんだ。

体だって本当は切望してやまない。

だけど躊躇するのは。

エレノアが男で。

それが禁忌だと俺のどこかの理性が歯止めをかけてるから。

そして無理やりやってしまえばきつと。

俺は後悔してもしきれない。

立派な犯罪者になってしまっから。

「…どうしたらお前は信用するんだ？」

私はどうしたらいい？」

エレノアの細い体から鼓動がする。
細い小さな体から董の香りがする。
悲痛な声を伴って。

「…エレノアは体を賭けても良いってぐらい俺に頼みがあるなら。」
俺は言葉を紡いだ。

「エレノアからキスして。」

…エレノアは俺を引き寄せて。
軽く口づけた。
心は見えない。

エレノアの唇が離れたと同時に俺はエレノアの顔を捕えて。
貪るように口づけた。

息をする間も。

話す暇も与えないぐらい荒々しく。

…エレノアの顔が恐怖に歪んで。
それでもエレノアの唇を貪り続けると。

「…もうやめっ！！！！」

本当にエレノアは泣いてしまった。
大きな瞳から涙が伝う。

…おいおい。お前男だろう？と俺は思い。
少し力を緩めた。

「エレノアが言ったんだからな？」
約束忘れんなよ。」

追い打ちをかけるように言って。
最後に止めを刺す。

「体賭けたこと後悔しても遅いからな。

俺は絶対手は緩めないし。

お前の体好きにさせてもらうからな。」

エレノアは恐怖を顔に滲ませ俺を見た。

「そんな顔しても無駄だつて。

俺お前の顔に弱いけどこれは別だ。

こんなんでそんな俺の事を怖いって思ったらお前今度俺に抱かれるときどうすんの？

キスでそんな怖いって顔されたらもつと今度は怖いと思うけど？

何しろ今度は俺の好きにさせてもらうんだからな。」

俺は意地が悪い。

エレノアの恐怖に駆られた表情を見たら普通は。

俺も悪かっただとか？

さっきのはナシにしてやってもいいとか。

思わなかったこともないこともないけど。

散々焦らされてるんだからこれぐらいいいんじゃないかって思うんだ。

小さな幸せ（Eleanor ver.）

本当は怖くて。

言った後すぐに後悔したんだ。

私の意志はすぐに折れてしまっから。

折れそうになってしまっから。

だからせめて私にとって最後の砦？と言っていいかどうかわからなかったけど。

（だって私は女じゃないから）

でも言いようのない恐怖がすぐに襲って来て。

目の前の男が舌なめずりをして私を見るのが判って。

「悪い。撤回させて。」と言えるような雰囲気でも最早なかったし。それを目の前の男は見抜いたから。

「俺を信用させてみるよ。」と言ってきた。

決して目の前の男の気持ち弄んだわけじゃないけど。結果的に本気にさせてしまった。

私には証明できることなんて思いつかず。

「…どうすればいい？」
そう問うと。

男はいやらしい顔で。

私からのキスをせがんだ。

私は意を決して触れるだけのキスをしたんだ。

相当勇気も要ったし心臓だってバクバク言っただろうかこれにこの男が気づきませんよと願うばかりで。

…男に隙を突かれた。

触れるだけのキスでは男は許さなかったんだ。

私は嵐のように男に翻弄されて。

息もつけない。

四肢に力も入らない。

そんなキスをずっと受けてたら狂いそうだった。

そう煽ったのは私。

判ってる。

判ってるけど泣けてきた。

こいつは本気だったんだって。

私の事本気だったんだって。

「っもうやめっ！！！」

やっと出た言葉は小さくて。

男はニヤリと笑い。

言ったんだ。

「エレノアが言ったんだからな。体を賭けても良いって。」

私が恐怖に震えるとさらに男は続ける。

「キスだけでそんな怖いんならこれからどうするんだ？」

今からもつと怖いぞ？

何しろ俺の好きにするんだから。」

突き付けられて息も出来なかった。

怖くて。怖くて。

飢えた獣みたいな男を本気にしてしまったのは私で。

…怖くて。

でももし全部上手くいったら。

その時はと誓う。

私の体なんか何の価値もないから。

エレノア・エアデール 1

一息ついて。

エレノアは口を開いた。

「お前にアスカに会いに行ってもらって。

自分の無実を晴らして来い。」

そう言うんだ。

確かエレノアは「頼みがある」と言った。

それがこれかよっ！！と俺は口を開きかけると。

「良いから黙って聞け。」

エレノアは続けた。

「アスカはお前を血眼で捜してる。

それは何でか判るか？」

俺が首を振ると。

「皇帝：アスカのボスがお前が瞬間移動して私の前に現れる半月から1ヶ月の誤差のうちに育ったんだ。

私も見たことはないけどガードが言うには結構な魔法の使い手らしい。」

そしてアスカの魔法をちゃんと受け継いだのは皮肉にもお前だけらしい。

だから血眼で捜してるんだ。

もし私なんかと組んで「危険因子」になったりしたら危ないからな。」

皮肉気にエレノアは呟いて。

「でもアスカは俺を殺すかも知れないんじゃない？」

俺がそう言つと。

エレノアはあははと笑い。

「お前。アスカのお気に入りでだから殺すもんか。

あいつは良い男が大好きで私から盗つたものは死ぬまで大事にするぞ。」

良いじゃないか。

アスカは女だしお前に丁度いいって私は思うぞ?」

「…それでエレノアは俺がそうしたらどうするつもりなんだ?」

「私?私は皇帝を殺るさ。」

相討ちぐらいは私でも出来るだろうって思うし。」

そこまで言つてエレノアは俺をハッと見上げた。

よく聞けば。

エレノアは生きるつもりは無いんだ。

「って嘘だから!!」

ホントそんな危ないことしないから!!」

焦つても。

もういくら否定しても遅い。

俺は心底頭に来て。

エレノアに掴みかかった。

「何なんだよ!!エレノア。」

お前俺をアスカにやつて自分だけで死ぬつもりで!!」

「…だつて仕方ないだろう?」

誰かがやらなきゃ何も変わらないんだ。

皇帝だつて私が敵ううちに倒さなきゃこの世界は滅亡するんだ。

黒魔法が蔓延って。

そのうち黒魔法にのまれて誰もいなくなってしまう。
ずっと魔法書に書いてあった。

黒魔法は封じなきゃいけないって。」

「……だからずっとエレノアは魔法書を読んだのか？」

エレノアは頷く。

だけど納得いかない。

「体賭けても良いって言ったのに俺との約束違えるのか？」

「……だからアスカは私と同じ顔してるし……。」

「ふざけんなよ……!!」

俺は許さない。お前が約束違えることも1人で死ぬことも。

絶対許さないから……!!」

エレノアはフツと笑って。

「……良いよ。聖に許されなくても。」

約束違える卑怯者でも良い。

私はお前に生きてほしいんだ。」

そう言っただけで悲しそうに笑うから。

エレノアの意志は固くて。

もう俺が何を言っても聞かなかった。

無理やり体をつなぎとめても意味はないって悟ったから俺は何もできなかった。

「……じゃあ俺はアスカのここに行ってあいつの魔法全部吸って来てやる。」

吸魔は得意なんだ。」

俺がそう言っただけでエレノアは瞳を細めて。

「うん」

そう言った。

だから俺は言ったんだ。

「だからエレノアはここにいて？」

せめてそれぐらい言うこと聞いて？

皇帝のとこに行く時は一緒にはいかないから。

約束するから。

アスカの魔力分けてやるから。」

エレノアが男なのをこういうときに痛感するんだ。

女ならきつと俺を頼るとか。

誰かに助けを乞うとか。

きつとね。

だけどエレノアはそうじゃない。

俺と同じ男の魂心を持ってる。

いくら見かけが軟弱で。

女と見間違っような背格好でも。

決めたことは突き通す。

それがエレノア・エアデール。

その人だから。

私はね。お前を送り出して。
待ってる自分がおかしかったんだ。

魔法書の中に黒魔法の封じ方が書いてあって。
もしそれに失敗したら「死なばもろとも」だを書いてあって。
見つけたとき情けない話恐怖に駆られて。
逃げ出したかった。

私は1番自分に相応しくない職場 酒場という場所に勤め。
髪は目立たないように黒く染めた。
バーテンの服も黒いから丁度目立たなくなつて。
シェイカーを振るのだけ一生懸命覚えて。

たまに様子を見に来るガードのご機嫌をとりながら。
魔力の復活を願つた。
幸か不幸か潜在能力としての白魔法ヒーリングはアスカに吸魔され
なかつたみたいで。
ヒーリングがまだ使えるということは後は私の努力と才能次第だつ
て思つて。

毎日頑張つたんだよ。
魔力がもともとそんなに強くない私にしては。
例えば炎を手の上で起こしてみるとか。

そんなとき聖が目の前に現れたんだ。
私はホント気づかなくて。
目の前に浮浪者みたいな服で瞳を伏せて座ってるあいつに。

知らずに声をかけた。

飲み物は何にするのかと。

だって酒場だし。

私の仕事をしただけだったのに。

あいつは私に気づき私を力強い腕で捕まえ放さなかったんだ。

そして今。

あいつは私なんか信じてアスカに会いに行った。

私はね。

本当はあいつが初めて会った時からずっと好きだった。

いつか魔法で運命見たことがあって。

私は白魔法を潜在的に使える人に惹かれるって。

そのとおりだった。

男だったのが残念だったけど。

でもそれが歯止めになってよかったと思ってるんだ。

私は弱いから。

一緒にいてほしいと情けない言葉吐きそうな自分が嫌で。

あいつが男だから私は頼ったらいけないって思えたんだから。

私はあいつに何も望まない。

心さえあいつに望まないから。

いつか。

いつかあいつが本当に好きな人が出来たとき。

私の思いが重荷になるのが嫌なんだ。

同性愛は禁忌だから。

私はそんなことで後ろめたい思いを持ってほしくないんだ。
まだキスだけなら単なる冗談で済む。
まだまともな道に戻れるから。

だから私は聖をまた裏切る。
許してなんて言わない。

ただ生きていてほしい。
ただ笑っていてほしい。

そしてできるなら幸せになってほしい。
私は1番それを願ってるから。

私は金のペンダントを外して2人掛けのテーブルの上に置く。
せめてもの餞別代わりだ。

約束なんかもう忘れた。

私は暗記した魔法を頭の中で唱え。
皇帝がいるシティへ向かったんだ。

エレノア・エアデイル 3

もしエレノアに会わなければこんな心の痛みなんか知らなかった。

だって俺は好き勝手不誠実に毎日楽しく生きていて。

彼女だつてとつかえひっかえ。

それは友人のイサミだつて驚くぐらいで。

イサミだつて人のこと言えないぐらい汚れまくってるくせに。

俺の事を表現するとき。

「アキヤには脱帽だよ。」

どれだけ彼女替われれば気にいるんだろう?」

俺はそんなん聞いても何も思わなかったし。

正直1人に束縛されるなんてまっぴらごめんだと思つてたから。

それがなんかの間違いで。

噂のエレノア・エアデイルに会つて。

俺の人生観変わったんだ。

俺になびかない人間がいるなんて思つてなかったし。

自信満々だったから。

でも他のことがもう気にならないぐらいエレノアを好きになって。

煽られて焦らされても。

禁忌は犯さなかったんだ。

犯せなかったんだ。

「アスカ!!!」

俺はエレノアに言われたとおりアスカに会いに行つて言つたんだ。

「アキヤ!!!」

何処に行つてたんだ？みんな探してたんだ!!!」

1カ月ぶり？ぐらいに再会するアスカはエレノアの顔なのに酷く派手だった。

「ごめん。瞬間移動の試しをやってみたら戻るのが遅くなつてしまつて。」

「…エレノアに会いに行つたんじゃないだろうな？」
アスカは怖い顔で俺を見上げた。

「…だつてエレノアはどこにいるかもわからないのに？
俺そんなにエレノアのこと好きじゃないし。」

あいつ男じゃん。」

力を込めて呟いた。
心が痛む。

「…で。どこに行つてたんだ？」

「場末の酒場。」

自分でも着いた先で意味が判らなくて戻ってくる手段もよくわからなくて。

そこでのバーテンに聞いて教えてもらったんだ。」

そういえばエレノアが最後に言つてたっけ？

アスカが怪しむようならお前お得意の垂らし込みで煙に巻けて。その時は憤慨したけど。

俺にはそれ以外手段がなくて。

「本当か？」

アスカが訝しんで俺を見るから。

「本当だつて。」

エレノアに会ったら俺アスカに会いに来ないって。」

そう言つてアスカを抱きしめた。

アスカはエレノアの顔をしていて。

俺はアスカにまた溺れそうになつた。

せめてエレノアがそんな俺に投げかけてくれる言葉さえあれば。

俺は流されない自信はあるのに。

きっとエレノアは何も言わない。

むしろほら言つたとおりだろう？と微笑むだろう。

アスカは魅力的で。

女で。

俺の好みを結集させたような女だから。

…それは俺の単なる言い訳か。

皇帝の居るシティには。

何重もの嚴重な結界が施されて。

私が知ってるシティとは様相がまるで違って。

シティには以前は水の都と呼ばれるぐらい水が豊富で。

きれいな水で満たされた面持ちは私にとっても誇りだったのに。

本部はいつの間にこんなに汚したのだろう。

皇帝には会ったことはないけど「気」で判る。

吐き気がしそうな純粹な悪の「気」。

それは誰もがきつと願ってやまない悪の「気」で。

染まるのは簡単に抵抗するのは難しい。

ただ皇帝はアスカもそうなんだけど悪いことをやってるんじゃないかと。
て。

やろうとしてることが結果的に悪いことで。

悪いことって大体そうでしょ？

誰かを困らせようと悪意を持ってやるんじゃないかと結果的にそうやってしまうこと。

皇帝がやりたいことは。

黒魔法でこの世界を支配したい。

ただそれだけで。

それに私が邪魔なだけ。
だから私におかんむりなんじゃなくて私が白魔法を生まれつき持つ
てるから。
邪魔なだけで。
聖には怒られるかもしれないけど聖と一緒に。
私を好きなんじゃなくて私の顔が好きだけで。
ただ錯覚を起こしてるだけで。

それは痛いほど知ってるんだ。
今ごろ聖はアスカに会って。
アスカを垂らし込んでるだろう。
私が言った言葉は的中で。

きつと聖は思ってる。
「何だ。俺。アスカでも良いじゃん。」って。

人間は誘惑に弱いから。
特にあんなにヤラシイ男だから。
アスカの大きな胸に顔を埋めて楽しくやってることだろう。

私を好きだなんて。
1度だって私は信じなかったよ。
だけど信じかけた。
でも私には信じかけたけど目が覚めた。
夢は夢なんだと。

私にはもうずっと悪い夢にしか思えない。
だから終わりにするんだ。

「エレノア・エアデールです。

聖アキヤについて説明に参りました。
それは命がけの最後の私の仕事。」

どうかこの世界がほろびませんように。

どうかこの身で守れますように。

どうか…聖が私の死を引きずりませんように。
ただそれだけを祈った。

アスカを抱いてしまった俺はベッドサイドで情けなくて頭を抱えた。

「どしたの〜？アキヤ。

元気ないじゃん？」

自己嫌悪だった。

こんなんじゃないアキノアが信じてくれないの当たり前で。

「う〜ん。ちょっと貧血気味かな。」

そう言うのアスカが笑って。

「欲求不満だったからじゃないの？」

「やっと満たされたって感じ〜？」

アスカは恥も何も無くて。

頭が悪そうな受け答えをして。

エレノアと同じ顔なのに。

「ってか私だってアキヤが激しいから〜VVVV

体壊れるかと思っただもん。

「やっぱり女が良いでしょ？」

「いつでもやれるんだよ？」

俺はますます眉間にしわを寄せて。

適当に頷いた。

アスカに流されたのは俺。

エレノアが言ったとおりだった。

「兄貴は私と同じ趣味だからまた被ったって思ってたんだ。

結局は私がアキヤゲットしたけど。

兄貴になんか渡さないよ。」

「えっ？」

「だから兄貴もアキヤのこと好きだよ。

兄弟だから判るんだ。

私は誰が幸せになっても文句はないけど。

兄貴だけは幸せになんかならせない。」

そしてアスカは続ける。

「でもよかつたって思うよ。

アキヤに男色の趣味がなくて。

いくら私と同じ顔で美形だからって兄貴は男なんだから。

兄貴は女愛せないんだよ。

近くに私みたいな蓮っ葉で兄貴の好きになつた人を悉く盗つていくような女がいると無理なんじゃない？

っていうか人間自体きつと愛せないよ。

だからキスもしない堅物で操をいつまでも守ってる。

つまらない人間だと思わない？」

俺は頭に来て。

絶対本気になんかなって怒っても損をするのは自分なのに。判っていたのに。

エレノアをそうやって蔑むアスカを許せなくて。

「…俺はそうは思わない。」

極力抑えた声で。

感情的にならないように。

言っただつもりなのに。

「えっ？」

「エレノアはつまんない人間なんかじゃないと思う。」
そこまで言っていると泣けてきて。

「嘘!!!マジで???」

「何アキヤ泣いてんの?」

だってエレノアはそんなにつまんない人間じゃないから。

「俺。何で泣いてるんだろ?」

「ちよつと大丈夫?」

「ヤバいじゃん。そんな何で泣いてるのか判らないだなんて。」

アスカはダボダボの上着を着てベッドから起き上がり。

「そつだ。」

皇帝に見てもらったらしいよ〜。

皇帝は何でも治せるし何でも相談したらやってくれるよ。

「私のボスなんだ。」

皇帝?

エレノアも何かそんな言葉を言ってた。

俺はうつすらそう思いながらアスカに促され服を着た。

そしてアスカに手を引かれて瞬間移動させられたんだ。

皇帝 2

「皇帝……。いないの……？」

瞬間移動をしてやってきたところは朽ちた扉がある部屋だった。

「皇帝……。開けるよ……。」

その扉をアスカが開けると中には白い部屋が広がってて、外側がこんなにも朽ちてるのにきれいな部屋だった。

そして俺が目を離せなくなったのは。

魔法を唱えるのエレノアの姿だったんだ。

「皇帝」とアスカに呼ばれたものは俺と同じぐらい若い男の姿をしてて。

エレノアはこちらに気づかず懸命に応戦してる。

「バカだね。兄貴は。」

気が消えたと思ったたらこんなところに来てたんだ。」

アスカはそう言って笑うんだ。

「皇帝に敵うわけないのに何考えてんの？」

しかも1人で。

でも仕方ないか。兄貴人を愛せないからパートナーなんか見つからないもんね？

唯一アキヤだけはってきつと思ったただろうけどもう私のものだし。

「

言いながらキスしてくるアスカに俺は嫌気がさして。

だけど。どうしても勇気がなくてされるがままになってた俺は自分にも腹が立って。

「アキヤが私を選んでくれてうれしかったし。

もう絶対放さないからv v v」

勝手に盛り上がり上がってるアスカに俺は渾身の力で手刀を繰り出したんだ。

「悪い。眠っててくれ。」

俺はそう呟いて。

女に手を上げる趣味は今までもこれからもないけど。

今回だけ例外で。

アスカは腹に俺の力一杯の手刀を食らって一瞬隙をついたんだ。

その時に素早く俺は吸魔を唱えた。

手の平からアスカの魔力を奪っていく。

目の前にエレノアは居て。

でも全然気がつかなくて。

俺が吸魔してる間もこちらを見る暇もなく応戦してる。

エレノアの分が悪いのもエレノアの動きが悪いのもこちらから見てるとよく判って。

でも唯一エレノアに救いだったのは。

俺みたいな輩じゃなくて純粋にエレノアと戦ってる「皇帝」だったから。

エレノアは力尽きるのも時間の問題だったけど。

俺にはどうする事も出来なかった。

アスカの魔力はまだまだ体内に流れ込んでくるし。

エレノアも「皇帝」も全く俺に気づかないし。

何が俺とエレノアの間を隔ててるのかよくわからないけど。
何かを阻んでるのは事実で。

その時だった。

「皇帝」がこちらに気づいたんだ。

だってね。思ったんだ。

私は聖がアスカと共にここに来たこと。

気づかないふりをしたんだ。

だって大切なものは私にとって「弱点」になるから。

だってね。「皇帝」は私を本気で憎んでた。

会うまでその憎悪に気づかなかったんだけど。

私の話はろくに聞かず襲ってきたんだ。

長い長い封印魔法は唱える時間がなくて。

ただ防戦一点だったんだ。

黒魔法にはそれを打ち消す白魔法を唱えて。

でも無理だった。

私力が尽きるのも時間の問題で。

自分の魔力の弱さを痛感したとこに。

聖が現れた。

私は出来るだけ攻撃に転じたんだ。

聖に「皇帝」が気づかないように祈りながら。

でも気付いてしまった。

聖は私を心配そうに見つめていた。

そして「皇帝」は聖を人質にしたんだ。

聖の首周りに腕を回し私に言った。

「こいつの命が惜しいなら言うことを聞け。」と。

1番私が恐れてた事態だった。

私は両手を上げて降参のポーズをとり。

苦痛にゆがむ聖の顔が辛くて。

目を伏せた。

言いたいことはたくさんあったけど何も言えなかった。

「聖アキヤがお前の弱点だって教えてくれたのはお前の妹のアスカだ。」

身内に裏切られる気分はどうだ？」

聖を苦しめたまま「皇帝」は言った。

「最悪です。」

自分の弱さが一気に露呈しました。」

私は震える腕を懸命に隠しながらやっとの事で言葉を紡いだ。

だけどね。」

心の中までは「皇帝」にだって見せない。

私は初めから封印白魔法を心の中で唱え始めたんだ。

「アスカは悪魔の俺に魂を売った。」

だから俺は力を持ち皇帝になった。

人間世界がこんなに楽しめる場所だったなんて感激だな。」

「…そう…ですか？」

「命を張ってまで守るものがあるなんて吐き気がするよ。」

エレノア。

やっぱりお前には死んでもらう。」

「…判りました。」

「もう降参か？つまらない。」

俺はお前が幸せなのが1番気に食わないんだ。」

「皇帝」ってアスカの願いを聞き入れたときアスカの私に対する憎悪が人間の形をとった姿だから。

アスカは昔から願ってた。

同じ顔をしてるのに自分は私ほど人に愛されないうつて。だから悪魔召喚を行って強くなった。

だから私からどんどん幸せを奪っていく。

「…ダケドワタシハシアワセデス。」
最後の魔法は。

口に出した。

そこで「皇帝」はやっと気づいた。

私が魔法を唱えていたことに。

多分ね。

ホント多分なんだけど「皇帝」にはきつと自分の命張ってでも守るものがあるなんて。

きつと思っただけでなかったら油断したんだ。

聖は皇帝の腕を首に回されてぐったりしてた。

「ダケドワタシハシアワセデス。」

最後を繰り返すと私は力尽きて。

ギヤアアアアアアという皇帝の断末魔も聞こえた。

そして意識が遠くなったんだ。

封印白魔法は魔法書を読んで気づいたんだ。
自分が1番大事にしてる言葉だって。

私には何もなかったけど。

聖が私の生徒になりたいって言いだして。
私の事を好きだと言ってくれたことによって気づいたんだ。

アスカに聖は寝とられて。

でも仕方ないと私は頭ではわかってたのに。
感情が上手くコントロールできなくて。

色々あったけど結局私結構幸せだったんだって思えたんだ。

だから封印白魔法の最後の言葉は。

「ダケドワタシハシアワセデス」なんだ。

幸せって思えるほど聖の事を信用してるわけじゃないし。
だけど私を好きだって言うてくれる人に会えただけできつと私は幸
せなんだって。

私の不幸を何より望む皇帝とアスカに言いたかったんだ。

命賭けたとしても。

ダケドワタシハシアワセデスって。

それぐらい聖を愛してたんだ。

男だから一生言わないけど。

つてかもう私死ぬから言えないけど。

大好きだよ。

愛してた。

あなたの重荷にならないように私は一生言わないし言えないけど。
あなたに会わなかったらきつとこの魔法も唱えられなかった。

神さまがきつと私に歯止めをかけるよう。

私を男に生まれさせて。

愛する人は男で。

でも私は神さまを恨まなかった。

むしろ私を聖に会わせてくれてありがとうって思った。

きつと私は女に生まれてたら。

きつと神官になってないし。

神官の講師になってなかったら聖には会ってないから。
すべて必然で絶対だから。

ああ。心臓が止まる。

クリアな意識の中で。

でも私は幸せだった。

ダケドワタシハシアワセデス。

精魂尽き果てる

……

だけど私は幸せです。

「何で?????」

俺が気づくと皇帝とアスカとそれからエレノアが散らばって動かなかった。

途中までは覚えてるんだけど。

皇帝に気づかれて俺は首を絞められて意識が遠くなつて。

その時に聞こえたのはエレノアの言葉。

「ダケドワタシハシアワセデス。」

妙にクリアで。

それしか覚えてなくて。

でも覚悟を決めたエレノアが言った言葉はきつと。

何かの魔法で。

俺には判らないけどきつと。

エレノアに近寄ると息もしてなく横たわっていて。

「そんな…嘘だろう?」

悪夢だと思った。

そりゃ向こうから見てた時はいつ力尽きてもおかしくないように見えてたけど。

実際は違うつてどこかで思ってたんだ。

「エレノア!!!起きろよ!!!」

そんな恰好で寝てるなら襲っぞ!!!」

エレノアを揺すつて。

そう言ったら起きてくれるって信じていのに。

「俺本気だぞ！！！！」

本気で…。

本気で好きで。

本当に大好きで。

「起きろよ！！！！俺の好きにしたらいってお前言ったじゃないか！！！！」

俺はその唇に口づけたんだ。

冷たいその唇はきつともうダメだって俺に伝える。

鼓動は聞こえない。

でも俺は諦めなかった。

「アス力から奪った魔力やるって俺約束してたから受け取ってくれ。」

俺は口づけて魔法を唱えた。

吸魔と反対の収魔。

俺の体温から魔力はエレノアの唇に伝わっていく。

そしてだんだん温かくなって。

エレノアが目を開けたんだ。

少し咳きこみながら目をあけて。

心臓が動き出した。

鼓動が聞こえた。

「エレノア！！！！！！」

俺は思わず力一杯抱きしめたんだ。

「皇帝は…?」

エレノアの開口一番はそれだった。
あまりにらしくて笑えて。

「あそこだ。」

アスカと倒れてる。」

俺が指をさすと俺の腕を押しつけて。
ふらふらしてるのに寄って行って。

皇帝の剣を抜き取って。

止めを刺そうとしたんだ。

俺はあわてて後ろからエレノアを羽交い絞めにして言ったんだ。

「エレノア!!!」

お前何してんだよ!!!」

「…止めを刺さなきゃ。」

「わーっ!!!止めるって。」

俺が腕を離さないでいると。

エレノアは怖い声を出した。

「放せ!!!お前も殺すぞ!!!」

今止めを刺さないとまた繰り返すんだ!!!」

「良いんだって。」

俺は言ったんだ。

「止めなんか刺さないでいいんだって。」

だってまたその時にコテンパンにやっつけねばいいだろう?」

エレノアがこんな奴のために犯罪者になる必要はないんだ。」

エレノアは愛しくて。
相変わらず抱きしめたら董の香りがした。

腕の中でエレノアは呟いた。

「約束：守らなきゃな。」

俺はそう言うエレノアが愛しくて。

「早く帰ろう。」

そう言っただけ瞬間移動をした。

もちろん白魔法のね。

誰よりも君を愛す

「…ほんとうにやるの？」

後日エレノアの魔力が戻ってから。

エレノアが俺に呟いた言葉はこれだった。

「嫌なのかよ？」

俺は少し眉根を寄せて聞く。

「正直嫌…だし。」

「…ってかアスカの方が良いって絶対思っつて。」

「まだそんなこと言っつてんのか？」

「…だつて絶対こんなん良いわけないし。」

エレノアは俺を見上げる。

その目に弱い俺は心を鬼にしてエレノアを抱きしめる。

「…つて聖。」

エレノアは抱きしめられて身をよじる。

「好きにしていって言ったのはエレノアさん。お前だよ。」

俺が意地悪くそう言つと。

「それは…そうなんだけど。」

力なく呟いて。

俺を見上げるんだ。

「ホントにやらなきゃダメ？」

何だか酷く凌辱してみたいで。

腕の中でエレノアは充分に色気を振りまいていて。

俺は何だかホントにやられそうになった。

「う〜ん。じゃあ妥協案。」

エレノアから1日1回は俺のこと好きって言って？

それから1日1回は抱きしめさせて？

そして1日1回はキスして。冗談では済まないようなやつ。」

俺が求めてるのは体じゃない精神的つながりだったから。

もちろん体は欲しいよ。男だもん。」

だけどそんなに怖いんなら待っても良い。

エレノアの覚悟が決まるまで。

「…ごめん。約束破って。」

エレノアは腕の中で縮こまった。

「じゃあ。俺のこと好きって言って？」

俺が促すと耳元でエレノアは言った。

「誰より1番愛してる。」

その言葉は俺の琴線に響いた。

「…ってか我慢ね…。」

俺は自分に鞭打ってエレノアから離れて。

エレノアを押し倒しそうな自分に鞭打って。

キスだけ盛大にしたんだ。

キスぐらいさせてほしい。

息もつけないぐらい。

エレノアは俺の本気のキスに窒息寸前だった。

腕の中でグッタリするエレノアを抱きかかえて俺はまた1人こちた。

「ってか俺。すっげーかわいそうじゃねえ？」

思い人は腕の中に確かにいる人だけど。
手も出せないだなんて。

「精神修行だな。これからも。」

俺は呟きエレノアの首元をペロツと舐める。

「ホント美味しそうなのに。」

エレノア・エアデール。

俺の思い人の名前。

愛しい愛しい人の名前。

終。

誰よりも君を愛す（後書き）

やっとおわりです。

結局最後までいきませんでした。が次に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7863h/>

Eleanor Airdeal

2010年11月23日02時47分発行